

家庭・保育所・幼稚園

# 幼児の教育

第五十四卷 第九號

日本園有幼道海別扱五幼道海第第六二二号



特集  
日本保育学会第八回大会研究発表

# トツパンの 人形絵本

N・H・Kの連続放送劇でおなじみの「やん坊にん坊とん坊」がかわいい人形になりました。

☆ やん坊にん坊とん坊と  
おともだち

☆ ぶーぼんせんせい海の冒険

— 既刊 —  
あかすきんちゃん  
じゃつくと豆のき  
びーたーとおおかみ  
三びきのくま  
三びきのこぶた  
ぶーぼん先生の  
あふりか探険



厚くて丈夫な  
貼合せ絵本 各 100 円

トツパンの絵本はフレール館または代理店にてお取次ぎいたしております。

トツパン 東京日本橋茅場町1の20・振替東京・41647

新刊

## 幼児の劇あそび集

A5判 約二百余頁  
頒価 二二〇円

当幼稚園において、實際子どもたちが、よろこんであそんだもの二十数種をおさめたものでございます。

劇の長さ、用いられたことば、中に盛りこまれた内容、その扮装、参加人員などの諸点で、子供の自然の生活そのまゝ、ございませう。

無理のない幼児向きの劇あそび集として、皆様にお奨めいたします。

お茶の水女子大学附属幼稚園内

幼児教育研究会編

▽新刊おしらせ△

お茶の水女子大学附属幼稚園  
幼児教育研究会編

### 幼児の教育内容とその指導

A 五上製  
二三〇頁  
定価二二〇円  
〒二四四円

【内容】幼児の教育内容を扱うにあたって 健康・運動(一)、健康安全 二、健康習慣 三、運動 四、(休息) 社会(一)、独立生活 二、友だち遊び 三、集団生活 四、問題解決 五、社会生活) 自然 言語(一)、会話 二、お話・紙芝居 三、話し合ひ・劇遊び 四、絵本・文字) 音楽リズム(一)、歌 二、リズム 三、楽器 四、鑑賞) 絵画製作

株式会社  
フレール館

幼児の教育 第五十四卷 第九号  
日本保育学会第八回大会特集号

編集主幹 及川ふみ 編集主任 津守 真  
協力委員 牛島義友 齋藤文雄 多田鉄雄  
波多野完治 山下俊郎 (順不同)  
表紙……………鈴木信太郎

(研)(究)(発)(表) 第 1 日

1. 入学期前後の幼児健康状態について……………川村短期大学 岩吉 田 弘美 (4)
2. 二、三歳児の社会的行動の研究……………愛育研究所 植 松 治 子 (5)
3. マザリングの実験……………名古屋市立保育短大 甚 藤 川 味 善 目 法 朋 子 (8)
4. 幼児に与へる保母の影響について……………名古屋市保育短大 岩 珠 瀬 川 節 善 子 (10)
5. 幼児の知能に関する調査……………愛育研究所 伊和村 勢 山 山 孔 貞 子 雄 (12)

倉橋惣三先生追悼講演会

主催

日本幼稚園協会  
日本保育学会

	6.	音楽素質診断テストについての一考察(其の一)……………	神田寺幼稚園	森崎君枝	(16)
	7.	音楽素質診断テストについて(其の一)……………	姫路工業大学	高釘守	(18)
	8.	幼児用絵画統覚検査(RCAT)作成の試みについて……………	芦屋市児童教育研究所 須栄短期大学 西宮市上甲子園小学校	山本真 吉本忠 右正脩	(20)
	9.	幼児用絵画統覚検査(RCAT)の適用事例について……………	(同)	加藤清	(23)
	10.	遊戯療法とCATによる診断と指導……………	松本市立松本幼稚園	藤田清	(25)
	11.	幼児・児童絵画統覚検査について……………	お茶の水女子大学	浜田駒	(28)
	12.	Finger-Painting について(2)……………	大阪市立大学	並西勝一 小河信一	(30)
	13.	幼児における Group Therapy……………	愛育研究所	権森平 森脇俊	(32)
	14.	一施設幼児の社会性の研究……………	日本女子大学	高石児 橋井玉 显雅	(34)
(研)	(究)	(発)	(表)	第 2 日	
1.	幼児の遊びの観察……………	名古屋大学	旭妙子	(36)	
2.	家庭における保育知識をめぐる問題点……………	名城大学	田中一成	(38)	

3. 幼児の偏食に関する総合的研究(其の一)……………国立精神衛生研究所  
東京家政大学 鈴木 玉 田 井 収 介 (41)
4. 同 右
5. 同 右
6. 一年保育児と二年保育年児との身体的差異について…千葉 大学 宮 内 孝 (43)
7. 保育環境が歯(乳歯)の石灰化に及ぼす影響について…保育医学研究会 深 田 英 朗 (46)
8. 新入園児のスキップ調査……………静岡県立保育専門学院 小 木 曾 光 子 (48)
9. 幼児の質問と保育課程の構成……………埼 玉 大 学 野 間 郁 夫 (51)
10. 精神薄弱児の言語に関する考察……………名古屋市立保育短期大学 棚 橋 節 子 (56)  
加賀美 あぐり  
甲松 田 鶴 子  
広 子
11. 保育園児の社会的成熟度について……………名古屋市立保育短期大学 甲 斐 井 久 淑 生 子 (59)
12. 幼児の自由画と生活感情……………西南学院短期大学 高 橋 さ や か (61)
13. 幼児画の指導について……………牛込伸之幼稚園 友 田 静 恵 (64)
14. 幼児の絵画指導に関する基本的研究……………栄光幼稚園 日 名 子 太 郎 (66)
15. 幼児の遊びに対する親の態度……………愛育研究所 竹 田 俊 雄 (68)
16. 保育学における現在の関心の問題……………東京都立大学 三 井 為 友 (71)
17. デューイの幼児教育思想とその現代的意義……………小 川 正 通 (73)

(学会共同研究報告及びシンポジウムは頁数の都合により来月号にまわします)

# 入学期前後の幼児健康状態について

— 保育の面よりみた子供の疾病に

関する調査研究 —

川村短期大学

吉田 弘美

岩原喜美子

豊島区内の九つの小学校二年児童千三百九十三名につき調査したものを、次の如く大きく分けて三項目にまとめ上げた。

## 一、幼稚園への通園と入学後の児童の疾病

千三百九十三名の児童中、幼稚園を卒業したものの四十七%と、幼稚園へ行かぬ五十三%を分類し、又、兄弟関係につき総領、中間の子、末子、一人子につき類別した。これにより幼稚園通園の有無と兄弟関係につき調査をまとめた。

次には、入学後一年間にかかった病気が、幼稚園通園の有無によってどのように異なるかをみた。

## 二、既往疾病から見た児童の健康状態

入学前と後では、子供達がどんな病気にかかっているかを調査し、幼児期から児童期に変っていく時の健康状態を疾病の上から伺った。次にはこの病気を、「一」で分類した兄弟間の位置関係と関連づけ、入学期前後の病気は、子供の兄弟の有無といかに関係があるかを調べた。

## 三、乳児期の幼児期に及ぼす影響

ここでは、項目を更に二つに分け、(一)は受乳期の栄養と、離乳時期との問題、(二)は受乳期の栄養と幼児、児童期にかかった病気について調べた。

即ち、普通子供の離乳期はいつ頃なものであるか、早い時期、又特におそいものでは、何才何ヶ月迄離乳しない等を見た。又(二)の方では、病気(調査用紙に書きこまれたもの全て)を消化器系、呼吸器系、発疹性のものの三種にわけて、授乳期の栄養即ち人工栄養、混合栄養、母乳栄養で育った子供により、かかった病気にどんな相異がみられるかを調べた。

一項目々の調査結果については、紙面の数の関係上、詳細には記せないが、だいたい、左の如くにまとめられる。しかし、このまとも、単にこの調査の対称となった豊島区内での結果であって、これが、一般的に云える決定的なものではないことを書き添えて置きたい。

### 調査結果のまとめ

1 豊島区内の九つの小学校では、幼稚園(わずかの保育園を含む)を卒業したものと、幼稚園へ行かなかった児との比は二対一・二である。

2 幼稚園へ行ったか行かなかったかは、兄弟の位置関係との関連が大きい。

3 入学後の病気にとって、幼稚園での生活は、麻疹や呼吸器系の病気以外には、たいした違いが認められない。

4 入学の前と後では、かかる病気の種類に大きな違いがみられる。

5 幼児期の病氣は、兄弟の有無が大きく影響している。

6 授乳期の栄養を分類してみると、幼児、児童期の消化器の疾病に對しては、混合栄養で育った子供が、一番、罹患率が高く他の栄養児の二倍弱となっている。殊に消化不良になったものが消化器系の病氣の四分一を占めている。

呼吸器系の疾病に對しては、人工栄養で育った児が、非常に高率を示し殆ど百パーセントに近い数字が見られる。

発疹性の病氣に對しては、混合栄養児が他の栄養児に比べ、わずかに高い感染率を示している。

7 前の6を總括して云うならば、この調査では、母乳栄養児は、他の栄養児に對し、比較的病氣にかかりにくいと云う結果を見る。

以上が調査結果のまとめであるが、これは、飽くまでも、統計的な調査への資料として算術平均により得た結果であつて、今後、これをもとに一層深く調査して行きたいと願つてゐる。

## 二、三才児の社会的行動の研究

愛育研究所

植松治子

山下先生の著書「幼児心理学」にも明記されている様に、子供が

第一反抗期に於いて、その周囲の大人と好ましい人間関係を結び得ると否とは、その後の發達に重大な影響を及ぼす。然し私達の周囲には、之等兩者の關係が一般に好ましくなく、時に善意に充ちた之等大人による刺戟の与え過ぎは、問題の親や子をつくつてゐる。そこでこの様な親子の要望に答え、試案として愛育幼稚園に「母と子の教室」を附設し、二、三才児の保育と並行して、その母親に正しい育児の知識と、技術を体得させる時間を設けた。

〔研究方法〕 昭和二十九年四月より翌三十年三月迄、週一回集つた子供二十名の中、十五名を対象として、登園後三十分を経過した後の十分間、子供達を自然の状態に於いて、それらの總ての行動觀察を記録した。

〔研究結果〕 以下その記録の中から社会的行動に関する面だけを抜き出して、(1)「社会的行動の現れ方の型、(2)發達の経過、(3)その他について、整理したものを簡単に報告する。

先ず私達は、觀察記録に先だち、子供の社会的行動の型を次の様にA、B、Cの三群に區別した。

A群 母親と他の場所を往ったり来たりするが、最後には完全に親から離れて保母や他の子供との仲間遊びが出来る様になつた。

B群 〓もじもじして親から離れないが後には並行遊びをする。

C群 親やその他家族の者につききりて離れないが独り遊びや他の子供の遊びを傍で見てゐる時はある。

この各群の子供達がどの様な経過をとり乍ら發達していったかを夫々の群の中から、比較的明瞭な群の型を具えているケースについ

〔事例〕

A群のAの場合	B群からA群に発達したBの場合	B群がB群のままて終わったTの場合
<p>A子は満三才、I. Q. [140]の女兒である。</p>	<p>B夫は満三才、I. Q. [111]の男児である。</p>	<p>T子は満二才、テスト不能の女兒</p>
<p>一回目は 10時30分に登園して母親から離れ、絵をかいたり積木をしたりしている子供を暫らくニコニコ眺めていたがそこへ行き「汽車ごっこ」をする。保母のピアノに合わせて不完全乍ら、すり足の様なスキップをする。お片付けになると椅子を机の囲りに並べ、積木を箱に片づける。</p> <p>食事の時は「頂きます」「ごちそうさま」帰る時は「さよなら」と大声で言う。</p> <p>二回目は 登園後暫らくは母の傍で周囲を見ていたが、やがて塗絵をしたり、砂場で遊んだり、ブランコに乗ったりする。</p> <p>三回目的時も同様。</p> <p>四回目 滑り台でニコニコ笑って滑っていると男の子が「こっちが早いんだ」と言う、それに「こっちが早いんだよ」と言い返し「早いんだ、早いんだ、一番」と笑う。ブランコの所で傍に来た女の子に「危いよ」と言い乍ら 3~4 回こぎ降りてから「ハイ」と言って交代する。この様にA子は2人の子に話しかけている。</p> <p>男の子に対しては競争意識をもつ遊戯的態度であり、女の子に対しては、ブランコを替ってあげようとする意志が見られる。之等の交渉は明らかに他から他への働きかけと見てよからう。</p> <p>十四回目 には内容は省くが他の子と簡単な会話を交わしている。</p> <p>この様にしてA群のA子はその後、回を重ねる毎に、その社会的行動の面に、裾がりと深さを持っていった。</p>	<p>一回目 10時に登園、上靴をはかせてもらい、バスケットを手に持ったまま、母親にくつついて他を黙って見ている。保母から渡された折紙で母親に飛行機を折って貰う。</p> <p>母に云われてその傍で恐る恐るクレヨンで絵をかいた。</p> <p>二回目 登園後、母の傍で汽車の積木を机の上に並べ「ポッポー」と言ったり、「今は山中、今は浜」と鼻歌の様に唱い乍ら、他の女の子を黙って誘い入れる。</p> <p>八回目 母から完全に離れて遊ぶ。「フレフレー慶応」と言って「ジャングルジム」のてっぺんで騒ぐ。</p> <p>他の子供達が下を通ると「オイ、登って来ないか。一番電車でございませう、ガッシュンガッシュン」等盛に友達に向けて大声を連発する。この様なことを繰返しながらついに完全にA群に入った。</p> <p>十回目 柿の実拾いの事からリーダーになろうとして他の男の子とけんかする。</p> <p>二十三回目 4人の子供を集めて「皆汽車ごっこだぞ、オーイ、君一番、いいか、つながって纏まるんだぞ」等、とにかく一人一人に役割をつけて、ごっこ遊びを始め、他の子供をリードして一つの纏った遊びが出来た様になった。</p>	<p>このケースは遂にA群に移らずに終わったが、若し適切な誘導がなされたならば、当然A群にも発達した子供と考えられる。</p>



C群からB群に発達したCの場合	C群がC群のままで終ったNの場合
C夫は満三才、I. Q. [126]の男児である	N夫は満三才、I. Q. [131]の男児である
<p>一回目 保母に「お早よう」と言われて母親の後にかくれる。始終母親から離れず、左手の指をしゃぶり乍ら他の子供の遊びを傍観している。一度母から離れて外を見ていたが、又母の傍に戻り、帰る迄そうしていた。お弁当の時皆食べ始めても食べようとせず、人の顔許り見ている。保母に一口、二口食べさせて貰ったが、後は又黙って見ているだけで遂に食べなかった。このケースは二回～三回と同様な態度をくり返し、四～五回目の時暫らく母から離れ一人で塗絵をしたが、やがて立上り、ぼんやりと指をくわえていた。</p> <p>六～七回目 は又母親の傍から離れなくなった。</p> <p>八～九回目 も同様である。十～十一回目には当幼稚園に通っている姉がついて来て、一緒に絵をかいた。尙ニコニコして積木遊びをした。</p> <p>十七回目 には「人蔘と妻ヲラ」のおつなぎの時に「真中」「え」「え」と妻わらと人蔘を交互に保母に示しては問いかけ、そつと気をつけてさし通す。終ると「なくなっちゃった」と示す。保母に首飾にしてかけて貰うとニコニコする。</p> <p>十八回目 男の子にブランコを交替して貰いニコニコ笑って一人に乗る。保母が「20」と数えると、ブランコを降り、他の子と交替するが、又再び乗り、「動かない、動かない」と足で土をけり乍ら周囲を見廻すが「おしてくれ」とは頼まなかった。</p>	<p>一回目 登園以来母親の傍を絶対に離れない。バスケットを置くにも、紙を貰うにも、コップを渡された時も、椅子に腰かける時も、母親により添って動く。</p> <p>「お絵かきしましょう」と保母に誘われても動かず母にまつわりつき、他の子供達が積木で遊んでいるのや、ままごと遊びをしているのを、母の袖の下からのぞいていた。</p> <p>お弁当は、パンを少し食べた。</p> <p>五回目 母に始めてクレヨンを持たせて貰う絵をかく、その後「母の講座」の席へ行つたまま、子供達の部屋には遂に姿を現わさなかった。</p> <p>七回目 母でなく、女中が付添って来る。不断より元気がなく、一日中女中の袖に縋って、他の子供の遊びをぼんやり眺めていた。</p> <p>然しこの日始めて、帰る時名前を呼ばれて「ハイ」と返事が出来た。</p> <p>九回目 母の膝もとから離れなかったが、暫らくして母親から降りて独りで傍にある積木を手にとり、いじった。約三分程経つと、思い出した様に母の方え行き、帰る迄膝の上から降りなかった。</p> <p>十～十一回 も同様。</p> <p>十二回目 は母の傍から離れる。保母に絵本の中の人を示され「これは何」「これは」「これは」と尋ねられても、一言も返事をしない。</p> <p>十三回目 一日中母の膝で過す。</p> <p>十五～十六回目 女中と共に絵本を見たり、絵をかいたり、他の子供達の遊びを見たりしていた。この状態は最後まで続いていた。</p> <p>以上の様にこのケースは常に大人と共に室内遊びは出来たが、但し戸外の遊びは出来なかった。</p>

て、記録の概要を述べる、但し時間の都合上、所々を抜き出す事にする。

次に第二表は、この各群の子供達の発達していった経過を示すものである。(図表は頁数の都合により省略)

さて、先述の具体例からもうかがわれる様に、これ等十五名の子供達は、グループ行動の中で各々異った現れ方をして徐々に発達していったのであるが、各群の子供の遊び方の段階別を山下先生の著書を参照し、それにならって別けてみる時、吾がA群は、三段階の遊びを主として、四段階。B群は二段階を主として三段階。C群は一段階を主として二段階の遊び方をしている。その発達の過程を第三表で見るとA群の四人にB群の五人が入って九人になり、B群では、残った二人と、C群からの三人が入って五人になり、C群は一人になった。(表省略)

ブラツグが二才台では独り遊び、傍観、並行的遊び、の三つが大部分を占め、三才台から四才台へと年齢が進むにつれて急激に減ると言っているが、ここでも同じ様な現れ方をしている。

以上、簡単ではあったが、一年間の観察記録の結果を報告した。子供は集団生活していると、放置しておいても、或る時間が経過すると、社会性が発達し、ある程度迄の社会的行動が出来るものと言えよう。但し、C群のNが現在、吾が幼稚園生活になじむ事が出来た事例から見ると、二・三才児の保育の時に適切な誘導がなされていたら、比較的短時間で、他のC群の子供がB群に移った様に、発達していったかも知れない、然し社会性を早期に養う事自体にも問題がある。ともあれ、この度の試案の結果から痛感させられる事

は、二・三才児に、基本的習慣の基礎づけこそ、第一義的なものと言ふ事が出来、社会性の問題は、第二義的なものである。現在二・三才児保育を単なる自然集団としての観察ではなく、保育すると言う意図のもとに、前年度の試案を基にして、計画を立て、その生活を積極的に誘導し、尚行動観察の記録をして未解決の問題を研究しつつある。最後に、附言したい事は、この研究により、二、三才児といえども「リーダー型」「模倣型」「けんか型」と言う型や、「仲間になる子供の性質の分類」等の課題が浮び出て来た事である。

## マザリングの実験

名古屋市立保育短期大学

珠川 善子  
安藤 味法子  
甚 目 朋

施設に収容されて育つ子供は、ホスピタリズムによって、円満なパースナリティの発達が阻害されるといわれている。マーガレットリプルはこのホスピタリズム解消の一方策として、マザリングを主張した。私共はその重大な意味を感じて、追試実験をした。

マザリングとは、リプルによれば、成熟した感情の健康な女性が、子供を生み育てる時自然に現わす凡ての愛撫の動作を含むもので、食物と同様に欠く事の出来ないものである。

## 実 験

(1) 対象 S乳児院に収容中の特に愛情飢餓に陥っていると思われる男児A、女児B、兩人共、不活潑、無気力、無反応、無愛情が著るしく、具体的にも精神的にも発育が標準よりおかれていた。

(2) 実施 昭和二十九年一〇月一五日より一月末日までの三カ月間毎日時間をきめて接触し、おしめの取替、入浴、食事の世話、遊び相手、理髪、授乳、頬すり、話し相手、抱き歩き等、時間中ずきなく適宜行動した。

## 事 例

▽A児、昭和二八年九月生れの男児△母二七才の時、九カ月で出生し、人工哺乳で栄養せられていた。その後、母親は本児を父の許に残し、離別し、父親は本児を遺棄し、乳児院に収容されたものである。当時生後五カ月、生後十一カ月に於て、身体発育は約三カ月、精神発達は約四カ月のおくれが、認められた。私達が訪れた当時はまだ首もすわらず顔面蒼白で貧血症状を呈し、動作ものろく独り立ちがやっとで、這う事は出来ず、あやしても殆んど無反応である。

本児が私達になれるに従って、にこにこして、服のボタンやバッチを珍らしげにさわってみたり、日を重ねるに従って、行動や表情にある程度の積極性が認められようになって来たが、まだ、普通児に比して、消極にでて不活潑であった。十一月になるとすっかり顔を覚え、部屋に入ると嬉々として私達を迎えるようになり、嫉妬の動作も認められた、甘える動作が目立って来て、部屋に入ると、早く抱いてくれと、甘え声を発し、独り遊んでいても、帰ろうとすると帰らずまいとするようになった。独占しようとする傾向もみられた

十一月の終り頃には、独り遊びを好んでするようになり、持続時間が次第に長くなって来た。十二月に入ると、食欲旺盛、夕食後七時頃から就眠、熟睡が認められた。表情は明るくなり、気力が出、顔色がよくなり、玩具をもっておしゃべりしながら、あちこち行ったり来たりした。この月をはじめてマンマとはっきりいった。及私達の動作の真似をする様になった。この頃の発育は、大体標準に比して、運動の発達一カ月のおくれ、身体発達二カ月のおくれの程度に追っていたと認められた。

▽B児・昭和二十九年一月五日生の女児△貧困家庭の八人兄弟の四女で、生後二カ月に母が腹膜炎で死亡、措置収容となったものである。マザリング開始の十月当初、本人生後九カ月をすぎても、泣きも笑いもしない、愛想のない無表情な状態であった。十一月になると、時間になるまで平気であったおしめのよこれを、よければ取り替えを要求するようになり、とつかえれば、満足を示すようになった。甘える傾向を認められるようになり、泣く運動も多くなり、甘え泣きも多くなった。又声を立て、笑うようになって来た。この頃は約一カ月の遅滞を認められ、人見知りの動作が目立つようになり、名を呼ぶとふり返るようになった。十二月になると帰る時泣いて後を追うように声を立てる情緒や要求が、あらわに現われるようになりました。一月になると食事が順調になり人見知りがはっきりしてきた。

以上二例に於て、明らかかなように表情に暗いかげが取り去られて明るくなり、行動のおくれが促進せられ、社会性の変化が、目立っ

て来ている。施設に於ては、行きとどきにくい個人的な一対一の母性的愛情が、ホスピタリズムの重要な一因子をなすと考えられ、マザリングは、この方面においてホスピタリズムを或程度解消するのではないかという事が、私達の僅か二例ではあるが、顕著に認められました。収容児の変化によって充分予想せられる事であつて、今後更に数多くのケースについて実験するならば、より積極的な結論が得られると思ふ。

## 幼児に与える保母の影響について

名古屋市立保育短期大学

珠川善子  
岩瀬節子

### 研究目

就学前の園児の行動並びに態度に、決定的影響を及ぼすものは、家庭に於ける父母と、保育園に於ける保母の行動並び態度にある事は、云う迄もない事である。

一日の生活の大部分が、保育園での生活である為に、園児にとつて保母は、親に次いで、絶対的権威者であり、保母への同一視の欲求が極めて強く、保母の行動及び態度を模倣する事によって、この欲求を充たそうとするのである。

保母の一挙手、一投足は、何らかの形で、子供の行動並びに、反映するものと考えなければならない。従つてこゝした前提に立つて、私はこの調査を試みた。

### 手続

#### A 対象及び調査期間

満六才児の男子四五名、女子四五名を対象とし、昭和三〇年一月中旬年二月中迄の約一カ月を調査期間としました。

#### B 調査材料

幼児が日頃好んで良く用いる、黄色、青色、赤色、緑色、白色の五色を利用して、各色別に直径一〇センチの花を作り、材料とする。

#### C 調査方法

個別的に五ヶの花を与え好む花から選ばせて幼児の好む花と、嫌う花との序列作製を行う。

上の調査から、幼児の最も嫌う花(緑花)を園の諸先生方の胸につけて頂く(五日間)

嫌う色の刺戟を与えた五日後に、再度好む花と嫌う花とを選ばせて記録し、好悪の序列作製をする、これを最初のと比較し見当するのである。

### 結果

総数の九〇名に於いて調査した結果、第一回調査の場合、好む花としては、黄色が最上位で(二九名)次いで赤、青、白、緑(一二名)となり、嫌う花に於いては、緑花が最上位で(二三名)次いで、赤、青、白、黄と表われている。(第一表を参照)

第一表

	第1回調査結果	5日後の調査結果
好きな花	黄花・29名(32.2)	緑花・26名(28.9)
	赤花・20名(22.2)	黄花・26名(28.9)
	青花・17名(18.9)	赤花・18名(20.0)
	白花・12名(13.3)	白花・11名(12.2)
嫌いな花	緑花・23名(25.6)	白花・29名(32.2)
	赤花・21名(23.3)	青花・24名(26.7)
	黄花・21名(23.3)	赤花・21名(23.3)
	白花・18名(20.0)	黄花・8名(8.9)
	白花・7名(7.8)	緑花・8名(8.9)

第二表

	第1回調査結果	5日後の調査結果
好きな花	青花・16名(35.6)	緑花・20名(44.4)
	黄花・13名(28.9)	黄花・12名(26.7)
	白花・8名(17.8)	白花・6名(13.3)
	赤花・7名(15.6)	青花・6名(13.3)
嫌いな花	赤花・16名(35.6)	赤花・20名(37.8)
	緑花・11名(24.4)	白花・13名(28.9)
	黄花・8名(17.8)	青花・6名(13.3)
	白花・6名(13.3)	黄花・6名(13.3)
	赤花・4名(8.9)	緑花・3名(6.7)

( )内は%

この調査結果から、最も幼児の嫌う色花である緑色の花を、諸先生方につけて頂き、この花でもって幼児に刺戟を与えた五日後の再度の調査結果は、好む花に於ては、緑花が最上位に上と(二六名)次いで、黄、赤、白、青の順序となり、嫌う花では、白花、青、赤黄、緑(八名)と大きく変動した事が明らかに現われている。

男女別に、分けて見ると、男子の場合の第一回調査結果は、好む花、青花(一六名)で上位続いて、黄、白、緑(七名)赤花、嫌う花は、赤花(一六名)緑(一一名)白、黄、青(四名)であったのが、刺戟を与えられた五日後の結果では、好む花は、緑花(二〇名)で最上位に上り、続いて、黄、白、青(六名)赤となり、嫌う花に於いては、赤花、白、青(六名)黄緑(三名)で、緑花が全体に変化

している。(第二表参照)

女子の場合を見ると、第一回調査結果に於ける好みの花は、赤花(一九名)黄、緑(五名)白、青の順序であり、嫌う花としては、青花(一七名)緑(一二名)白、赤、黄と現われており、男子とは全然異っている。(第三表参照)

第三表

	第1回調査結果	5日後の調査結果
好きな花	赤花・19名(42.2)	赤花・17名(37.8)
	黄花・16名(35.6)	黄花・14名(31.1)
	青花・5名(11.1)	緑花・6名(13.3)
	白花・4名(8.9)	白花・5名(11.1)
嫌いな花	緑花・1名(2.2)	赤花・3名(6.7)
	黄花・17名(37.8)	青花・18名(40.0)
	青花・12名(26.7)	黄花・16名(35.6)
	赤花・10名(22.2)	赤花・5名(11.1)
	白花・5名(11.1)	黄花・4名(8.9)
	赤花・1名(2.2)	青花・2名(4.4)

( )内は%

五日後の結果は、好む花に於いては、赤花(一七名)黄、緑(六名)、白、青、で順位に変化は見られない。

嫌う花では、青花(一八名)次いで、白、緑五名赤、黄となり、緑花が二分の一に減少した所に、変化らしきものが、うかがわれる。

考察

目立たぬ緑花を、材料に用いたにも関わらず第一回調査結果と刺戟を与えた後の調査結果を比較して全体的に見ると、好む花に於いて約二倍に増加し嫌う花では約三分の一に減少した事は、先生方の子供に与える影響と考えられる。男女を比較して見ると、男子の方が緑花の刺戟に対して影響が大きく現われている。女子の場合、大きな変化は見られないが、しかし嫌う花に於いて、二分の一に減少した事は、やはり、先生の影響を受けていると思われる。

以上でこの実験の結果は、最初期待した程の大きな変化が好みの序列に見出す事は出来なかったが、保母が胸につけた花の影響を受けて、それが好みの序列に反映した事は確かであると、云う事は出来る。

## 幼児の知能に関する調査

愛育研究所 村山貞雄

和田礼子

伊勢山はつ

わが国の幼児の知能を団体的に検査して、相当数の幼児の知能について種々の調査をこころみることが、私達の研究の目的である。すなわち、幼児の知能について統計をとる場合、広い地域にわたってできるだけ多数の幼児について調査をすることが大切であると考えられる。そのために、幼児を団体的に測定することを考えた。そこで、幼児に適用される知能検査を利用しようとしたが、私達の希望にあうものがなかったので、知能検査用紙をまず作成した。幼児の知能を団体的に測定することは困難であるが、その原因を調査したところ、第一に近所の者の答をみたり、または逆に教えてやったりすること、それから第二に、幼児が検査にのって来ないこと、この二つが大きな原因であることが分った。

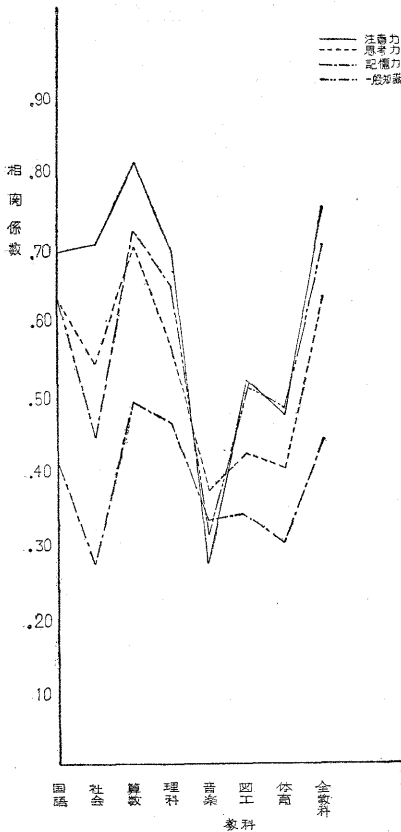
そこで、第一の困難な原因であるとなりの者を見たり逆に教えたりにすることを防ぐために、この検査用紙では、調査用紙を第一部と第二部の二種類作成し、これを一人おきにくばるようにした。この一部と二部は、検査者の指示や、検査の方法や、頁をあらわすカットなどはまったく同じであるが、答の位置や答の内容が違っているから、検査者は全体の幼児を同時に検査できるが、被検者である幼児がとなりの者をもみても役に立たぬことになる。そこでカンニングを防ぐことができた。

第二の困難な原因である検査にのらないことを防ぐために、問題は、一頁に一つだけとして、解答法はすべてクレヨンで丸を一つつけるだけにした。また問題の上に問題のありかを示すためのカットを大きく印刷した。それでも、なお用紙をひらいたときに、両方を見る幼児があるので、右の頁を青で印刷し、左の頁を赤で印刷した。調査の方法は、この検査を二回に分けておこなうようにし、第一回目から約十日ぐらい経った時にもう一回、今度は、一回目に第一部をやった者は第二部を、一回目に第二部をやった者は第一部をやるようにしたが、このようにすると、一回の検査が大体二十五分以内で済むので、幼児があきてしまつていい加減に答えることを防ぐことができた。しかも、二回調査することによって、検査の量がかなり多くなるので、大体精密に測定できた。なお幼児の検査に特にありがちなことであるが、その時のコンディションのむらによって生じる検査結果の影響を、検査に二回に分けておこなうことによつてかなり防げた。

なお採点は、上の頁の数字のまわりにある九つの星印の中に点を

(1) 図

各種知能と教科の成績の相関係数



なお思考力と注意力と記憶力と学習の関係をしらべるために小学一年生に調査したが、その結果は一図のようになる。すなわち、注意力と一般知能が学力との相関係数が高く、記憶力との関係が低く、教科では算数をはじめ国語や全教科が知能との相関係数が高く、音楽・体育・社会に音楽と知能との相関係数が低く、次に誕生月や保育月数など生育暦について、いろいろしらべたのであるが、特別な発見というようなものはない。たとえば、誕生月と知能偏差値の関係を表で示すと二図のようになる。これは各月の間に有意差はみられないが、六大都市と村とを別々にしらべたと

印刷しておいて、それと答の丸の位置とをならみ合わせて、紙の上はしに正答の場合は丸をつけ、つけ終わったら、第一部と第二部と重ねて、バラバラと紙をめくりながら、丸の数をかぞえて得点をだすようにした。

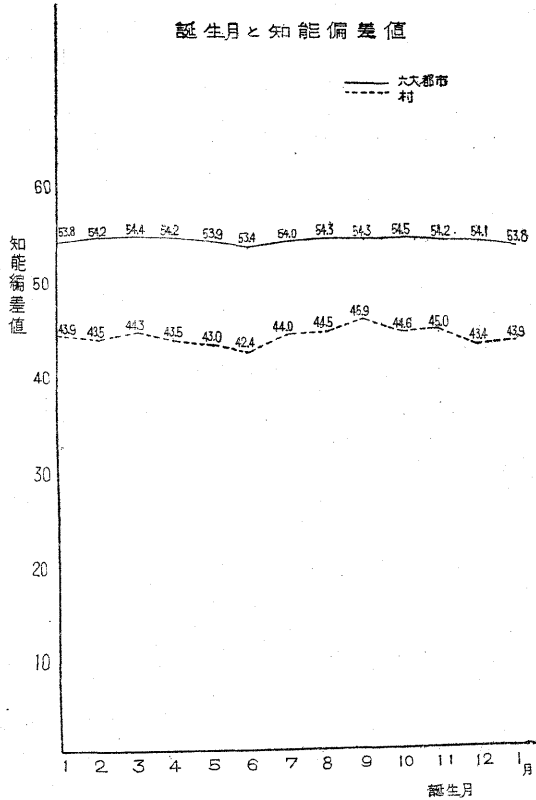
以上が検査の方法であるが、検査の内容は、左の赤い印刷はすべて注意力を主とした知能をしらべ、右の青い印刷はすべて思考力を主としてしらべ、最後の二頁は記憶力をしらべるもので、第一部第二部とをそれぞれ十点満点、合計それぞれ二十点満点とした。

以上の内容について、三十一の幼稚園と、二十八の保育所と、それから家庭の幼児、約九千名について調査した。これから幼児の知能について、いろいろのことを、私達は知ることができた。

先ず、知能の内容として、思考力と注意力と記憶力を考えたので

あるが、いずれも六大都市が最も高くあらわれている。しかし、六大都市・市・町・村という四つの都市化の分類によって調べると、六大都市や市などのように都市化したところでは思考力の得点が高くなり、思考偏差値が高くあらわれているのに反し、村や町などのように都市化しないところでは、記憶偏差値が高くあらわれている。このことは、このような知能の内容が環境によって差があることを示すのみでなく、ひいては、知能の内容にも環境によって非常に変わるものと、環境によってあまり変わらないものがあるのではないかという手がかりが考えられた。たとえば、記憶力などは比較的変わらなず、思考力などは比較的変わるのではないかと推測された。

誕生月と知能偏差値



ころ、どちらも同じような傾向、たとえば、三月頃に生れた者の知能が高く、六月頃に生れた者が低くでていることは興味をひいた。また村の方に生れ月による差が多いことは、もし生れ月による差が有意の差であるとした場合この四季か何かの自然の相異が都市のよりも文化的の生活では影響が少なくなると考えられるもので、もしこのようなことが、他の人々の再調査によって証明されたら面白い。

次に家庭と幼児の関係を調べたが、そのうち、ここに家庭の職業と知能との関係をあげてみました。この表で、線でかこんだのは調査人員千名以上、下に線を引いたものは調査人員百名以上のもので

ある。家庭の職業と知能との関係は、乱数表で抽出された小学低学年・小学高学年・中学校・高等学校の児童生徒八万名についても別に調査をし、調査結果を出したのであるが、大体似たり寄ったりで、法人・会社の役員・重役・教員・医師はいずれの場合も高く出、ついで公務員・商業・会社員・工員等があらわれており、わが国の人口の半ばを占める農業は、いずれの場合もきわめて低くでている。このように人口の半ばを占める農家の子どもも知能が、非常に低いということは、わが国の子どもも知能を考えるとき、もし農家の子どもなどをあまり考えずに基準をつくらうと、非常にまちがった基準ができ、誤った結果を生じる危険があることを示すものであると言えるであらう。

なお知能の低いものとしては、いずれの場合も、無職・日雇・農業・漁業・農漁業・船員・行商・鉦業などがあらわれている。そして、これらの職業は、農業をはじめと比較的人数が多いので、常に表は知能偏差値五十よりも上に大部分の職業があらわれる結果になった。

次に、いろいろな知能検査をしらべてみたところ、相関係数は、大体〇・六ぐらいであるが、知能値ではかなり違うものもある。右の数字は、この検査で知能指数が百のとき、これらの検査ではいくらかを示したもので、\*のついたのは、知能偏差値をあらわす。この結果に差のあることは、いずれかの検査にバイアスがあることを示すもので、現在では、知能指数がいくらといっても、使用した



家庭の職業と子弟の知能偏差値

知能偏差値の平均値	家庭の職業
57	卸業
56	法人会社の役員および重役 医師 雑貨屋
55	洗濯屋 銀行員 履物屋 洋品雑貨商
54	染物屋 教員 塗装業
53	歯科医 時計貴金属商 郵便局員 僧侶 呉服屋 家具屋
52	建具師 <u>会社員</u> 鉄道公社員 理髪屋 公務員
51	技師 町工場経営 警察官 労働者 菓子屋 駐留軍勤務者 土建業 自転車屋 飲食業 製造業 電気工 業屋
50	店員 酒屋 手内職 問屋 個人会社経営 運転手 商業
49	仕立屋 とび職 洋服屋 八百屋 佐官
48	大工 <u>工員</u> 人夫
47	保安隊 無職 風呂屋 日雇い 豆腐屋
46	<u>農業</u> 鋤夫
45	靴屋 魚屋 行商 運送業 船員

検査によって考えることが必要な段階にあるといえるであろう。次に、施設間の相異などについて調べたのであるが、その一例を示すと、三図にあるように、六大都市・市・町・村いずれも、幼稚園の方が保育所よりも知能偏差値の平均が高く、また都市化された

他の知能検査法との知能指数の比較

比較された知能検査法	相関係数	知能指数
WISC 知能診断検査法	.64	95.50
絵本低学年団体知能検査	.77	108.49
新乙式団体知能検査	.63	101.24
自由画による幼年児童知能テスト	.30	101.16
鈴木ビネー式知能検査法	.37	100.15
全学式診断知能テスト	.43	36.73*
田中ビネー式知能検査法	.72	94.72
低学年用知能テスト	.47	102.16
点数式田中個別知能検査法	.39	53.59*
乳幼児精神発達検査	.36	97.16
三浦B式新入児童一、二学年用知能テスト	.70	125.51
村山式知能検査低学年用甲種	.75	51.85*
幼児低学年用B式団体知能検査	.57	57.98*
幼児用田中B式知能検査	.59	85.55

\*印は偏差値

地域が都市化されない地域よりも知能が高くている。(図省略)  
次に個人差について、いろいろ調べたのであるが、知能偏差値二十以下が〇・八〇%すなわち、百人に約一人であった。また知能偏差値七十以上が一・八八%、すなわち五十人に約一人である。なお以上の調査は愛育研究所の教養部においておこなわれたものであるが、日本女子大学で非常な協力を得たことを附言して、わたしたちの発表を終わります。

# 音楽素質診断テスト についての一考察 其の一

神田寺幼稚園

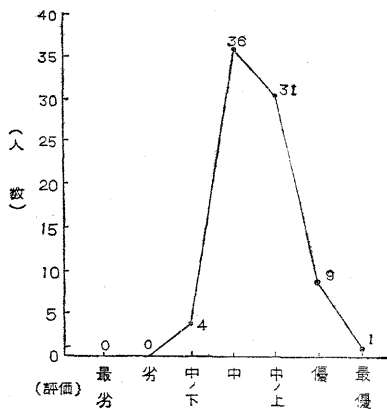
森崎 君枝

当園は東京都心にあり、通園児の殆んどが騒音の中で生活している最も都会的な幼児達である。そのために日常生活に於て音楽的な行動がスムーズに行われない様に思われる。これらの幼児に果してどの程度の音楽的感覚があるかというのが私共の疑問であった。幸い田中教育研究所の懇切な御指導のもとに同所発行の音楽素質診断テストを行う事が出来たので、その結果を御報告する。テスト内容、施行概要については紙数の関係で省略させて頂くが、施行したのは五才児八十五名である。

## 一、音楽テストの結果

評価点の分布を見ると第一表の通りで、劣を示すものはなく普通の分布状態を示している。第二表(A)は当園の音楽素質の傾向をみるために、音楽感受性能六項目の正答率をとってみたものである。高低弁別が最下位を示したのは幼児が理解しにくい問題の現れであろう。更に問題の難易の程度をみるために、感受性能を十九項目に分類した場合の得点率を示したのが第二表(B)である。上位を占める項

表一 テスト評価段階による分布表



第二表 A) 問題別得点率

順位	項目	%
1	強弱判別	79
2	表現鑑賞	66
3	数長端	65
4	リズム判断	60
5	協和判別	58
6	高低弁別	51

得が必要なもの、複雑な重奏のものとは下降しているのである。特に下位三項目は幼児には理解しにくい問題でもあり結果も香しくない。

## 二、WISCとの関係

WISC全検査のJQと音楽テスト得点との相関係数をみると第三表の様である。相関は何れも低く、音楽的素質の多くは感受であって、知的理解がさほど影響していない事がはっきりした。ただ低い中でも、比較的相関の高い項目はリズムと強弱で、これは、専門教師によって音符の理解、歌唱、リズムについての指導を受けているので、多少、知的に理解し得て

目をみると、感受を主として処理出来る内容が多く一番得点の低かった高低弁別の中でも、単一音の比較が稍よく、音群相互となると十四位となる。又全体を通じて一つの旋律、音群として把握するものがよく、音符の習

いたと思われる。協和に就ては、当園のみでなく、年令性別を問わず、全く知能との相関がない事が研究所でも表れていた。

第二表 B) 項目別得点率

順位	項目	%
1	速度に対する比較判断	99
2	音群全体の強弱の比較	93
3	演奏中の強弱判断	86
4	協和美醜に対する判断	86
5	旋律的表現に対する審美的判断	79
6	リズムに対する反応並に弁別	77
7	鑑賞力の程度	72
8	二、三、四声重奏に対する比較判断	66
9	休止に対する比較判断	63
10	音の数に対する確認	57
11	単一音に対する音高の比較弁別	56
12	高低数声部重奏に対する比較判断	55
13	類似リズムの確認	54
14	音群相互の高度に対する比較弁別	51
15	音低の比較弁別	49
16	音の長短に対する比較弁別	48
17	重奏される高低両声部に対する強弱判断	44
18	図表と旋律音とに対する相互確認	43
19	リズム的音群の確認	27

三、音楽環境調査との関係

音楽素質と知能との関係は前述の如く低いので、つづいて生活環境の音楽的要素を調査した。(調査内容省略) その結果と素質検査の相関係数表をみると、私共は、幼児時代は特に家庭環境の支配を受け易い時期ですから、きつと音楽的環境との間に何らかの相関があるだろうと思っていたのだ。その予想に反して、相関が低く、現存

第三表 WISC I. Q. との相関係数  $r=0.302$

音楽テスト 知能	高低	強弱	数、長短	リズム	協和	表現、 鑑賞
WISC	0.164	0.352	0.135	0.468	0.088	0.008

てしまい、環境にも恵まれていると即断しがちであるが、これらの検査及調査を知り、今後の指導に当って、新しい道が開けたように思えるのである。  
例えば、或る演出のある幼児を素質もあるし環境もよいと考えていたのだが、その音楽検査得点は37、評価段階が中と出た。反対に

第四表 環境調査との相関係数

音楽環境	家族態度	家庭適性	静的	適応性
音楽テスト	0.076	0.075	0.127	-0.022

註  
 家族の音楽的態度……………環境調査…⑤⑥⑦  
 家族の適性……………②③  
 静的環境……………①④⑨  
 子供の適応性……………⑧⑩

第五表 評価段階とピアノを習っている者の関係

人数		評価段階	
		人	人
最優 優上 中中 中下	優	1	1
	優	9	4
	中	51	2
	中	36	なし
	下	4	なし

ふだん非常に消極的で、リズム遊戯は殆んど行わず音楽に対する反応が極めて低い幼児が、音楽検査得点42、評価段階中上と出るのもあった。つまり、音楽の演出力にも、幼児の外向的或は内向的な性格が大いに関連するといえるわけである。それで日常生活に於ては内向性を示すものでも、特に興味

を持つ事には外向的な状態を表現する事もあり得るので、これらの幼児の指導点が明らかにされたわけでもある。環境調査中、楽器や歌を習った事がある者と素質検査の得点が一番関連がある様に思いその関係を見つけたのである。第五表の如く、素質に恵まれた幼児の才能は適当な指導によって伸びると云う万能性を示していると思

う。  
以上の様に、本テスト施行の結果は、私共保育者と幼児に対する音楽指導について幾つかの解答を与えてくれた。今後とも適時本テストを施行することにより、幼児の素質を正しく把握し、誘導方向を誤りなく捉えてゆきたいと思つう。

幼児に於ける田中教育研究所編

「音楽素質診断テストについて(その一)」

—主として音楽環境及びWISC結果との比較—

姫路工業大学

守屋光雄

釘宮 牙子

高橋 洋子

〔研究の主旨〕

今回は、田中教育研究所編「音楽素質診断テスト」を用いて、まづクラス(A)としてピアノヴァイオリンなどを習っている者。次にクラス(B)として習っていないが、教師その他によって優れているとみなされる者。更に(C)クラスは、習っていないが、劣っているとみなされる者。例えば音痴とよばれている者や、本人自身が音楽的興味を示さないし教師の評価も低い者の三段階に対象を選び、その年齢層を5才から6才の幼稚園児に限り、本テスト施行上の限界を知ると共に、これにWISC知能診断テストを併用し両者の相関を求めた。即ちこれら三段階の対象群がそれぞれ実際上の問題としての教師その他の評価点と如何なる関係を有しているのか、更に知能もしくわ性格的な因子とどのようにからみあっているのかを探ってみようとしたものである。但し今回は、被験児が少数であり信頼性に乏しい嫌があると思われるが、第一回実験として予備調査的なものとしたい。

〔対象〕

兵庫県姫路市立城北幼稚園、日の本幼稚園、網子マリア幼稚園の園児で、この中男児8名女児10名を選び、年齢は5才から6才に限

A ピアノヴァイオリンを習っている クラス				B 習っていないけれどすぐれ ているとみられるクラス				C 習っていないで劣っているとみ られるクラス			
	音楽 テスト 粗点	WISC IQ	相関係数	音楽 テスト 粗点	WISC IQ	相関係数	音楽 テスト 粗点	WISC IQ	相関係数		
WISC 全検査	1	39	105	1	35	133	1	14	93		
	2	40	102	2	36	108	2	24	80		
	3	40	119	3	37	102	3	34	99		
	4	40	115	4	36	99	4	26	109		
	5	41	103	5	36	116	5	30	91		
	6	29	98	6	27	93	6				
	7	39	105	7			7				
WISC 言語学検査	1	39	99	1	35	115	1	14	89		
	2	40	100	2	36	121	2	24	73		
	3	40	117	3	37	100	3	34	99		
	4	40	113	4	36	102	4	26	117		
	5	41	102	5	36	118	5	30	101		
	6	29	102	6	27	91	6				
	7	39	99	7			7				
WISC 動物性検査	1	39	110	1	35	141	1	14	97		
	2	40	104	2	36	93	2	24	93		
	3	40	116	3	37	104	3	34	86		
	4	40	113	4	36	94	4	26	98		
	5	41	102	5	36	109	5	30	82		
	6	29	93	6	27	97	6				
	7	39	110	7			7				

定した。

〔方法〕

最初、音楽テストを2乃至3名のグループに分けて前後二回に行い（この年齢層に於けるインスタラクションの理解はやや困難におもわれる。即ちテスト・シテイエイションに入り難いものが屢々生じている。特に問題一の高低は強弱などと混同され易く理解し難いようである）

〔結果の整理と考察〕

クラス(A)に於ける音楽テストは、被験児全体に平均して上位の評価点を有していることはクラス(B)(C)に比較して高位である点、ピアノなどを習っているという環境的な影響であるか、又は被験児自体の素質的な優位性が作用するものであるか、両者の相互作用の結果であるとも考えられるのではなからうか。更に全体を通じて問題6の「鑑賞・表現」が上位のプロフィールを描いている点(B)(C)には認められない。

次にクラス(A)の音楽テストがWISC全検査IQとの示す相関は、表1の如く0.621となり、知能との関係が予想される。又言語性IQとは0.202で有意性は認められないが、動作性IQに於いては0.713となり比較的高い相関を示している。このことは問題4の「リズム因子」が(A)に於いては中から上位へ移行する傾向が多く、又この年齢層のレディネスも考えられることから両者の関係に何等かの意味がもたらされおものとおもわれる。因みに、前田(立命大)の施行した中学生300名のシーショア音楽テストに於いてもリズム因子は最も影響が大で更に音楽素質診断テストに於ける同じく中学生300名の因子分析の結果

リズムが第一因子に予想されたと報告されている。但し、WISC 動作性の下位検査問題の性質として必しもリズム其の他の運動感覚を純粹にとり出していない点、例えば体力テストなどで個々の運動感覚との相関をみる方がより適切なのではあるまいか。

次にクラス(B)に於いてはまづクラス(A)より全体として評価点が劣るがWISCに於ける全検査QはクラスAのそれに劣っていないし逆に優れたケースも認められる。例えばM・T(♂)は動作性Iが最も高いにかかわらず音楽テストは中位である点などは注目される。なおクラス(B)に於けるWIのC全検査Qとの相関は<sup>0.574</sup>言語性Qとは<sup>0.981</sup>で極めて高く、反対に動作性Iとは、<sup>0.172</sup>で、この現象はクラス(A)と逆である。

第三に、クラス(C)では両テスト共に(A)(B)より低いことが目立つ。即ち音楽テストは、中より下位への移行が目立ち(A)(B)に比較して問題6の「鑑賞・表現」が劣っている。又、WISC全検査Qとの相関は<sup>0.212</sup>言語性Iとは<sup>0.355</sup>動作性Qとは<sup>0.336</sup>となっており(B)(C)に比較して極めて低く更に逆相関を示している点などについては、両テスト共に低い評価点を検出しているにも拘らず、相関係数算出に於ける数的処理の問題及び対象人員の不足などと共に対象群の選出などに再検討を加える必要があるものと思われる。

以上の点に加えて次回は、各サブテスト間の相関、因子分析などを行いこのテストの限界を求めてゆきたいと思う。

## 幼児用絵画統覚検査(R. C. A. T.) 作成の試みについて

芦屋市児童教育研究所 山本眞市

頌栄短期大学 西本脩

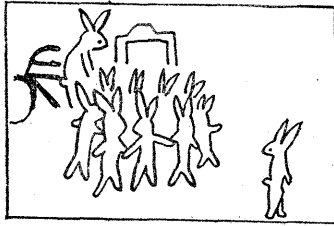
西宮市上甲子園小学校 吉井忠生

### 目的

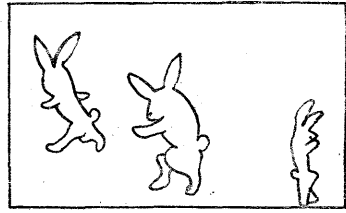
幼児の保育に直接あたっていられる先生方は、いろいろ問題の子供に出会われることと思う。そのとき何とかしてよい子に導いてやろうと思われても、ただ愛情だけではどうにもならない。その原因や問題点を或程度客観的につかみたいと思われるでしょう。このような目的に達するように考案されたものがこのテストである。即ち幼児に絵を見せてその絵を見ながらお話をつくらせる、そしてそのお話を分析してその子供のもっている欲求や圧力を知らうとするものである。

この種のテストとして Bellak の R. C. A. T. もあるのであるが本邦児童の生活習慣に適合しないために場面として不適なものがある。そこで本邦児童に最も親近性のある兎の漫画を材料として場面を構成した R. C. A. T. (Rabbit Children's Apperception Test) の作成を試みたのである。

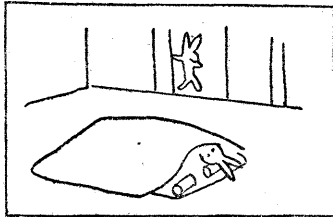
手続 (A) テスト作成上の留意点



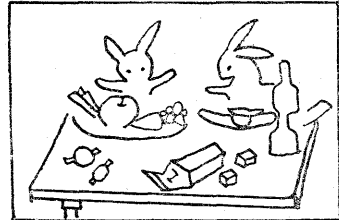
図版 3  
(紙芝居)



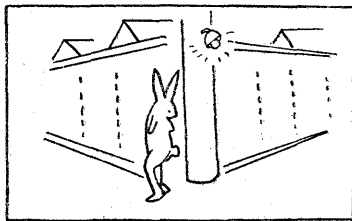
練習用図版  
(かくれんぼ)



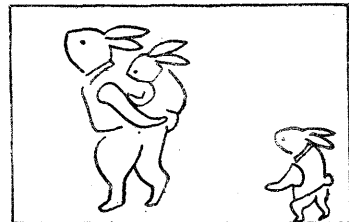
図版 5  
(ねどこ)



図版 1  
(おやつ)



図版 11  
(夜)



図版 2  
(おんぶ)

一、各場面の登場人物を全部兎にし  
た。そのわけは兎は古くより日本の  
子供にとって最も親しみのある動物  
であり都会、田舎にかかわらず子供  
たちにひとしく愛されているもので  
あるからである。

Bellak の C.A.T. ではライオン  
とか虎とか、カンガルーなどが用い  
られているが、その場合はそのもの  
自体のもつ性格に影響されてその投  
影がゆがめられるのではないだろう  
かと思われる。そこでどのようにな  
りも解釈できる(性的にも年令的に  
も)と思われる兎だけにした。

二、場面の構成については先づ幼児  
々童の日常生活における問題を予想  
し、それを課題解決場面として構成  
した。これを用いて、二年前より神  
戸、芦屋、西宮市の幼稚園児に予備  
実験をなし幼児児童の心理に合し最  
もと思われる一五枚を選んだ。(こ  
の外に練習用の図版がある。)この図  
版を全部示せばよいのであるが紙数  
も限られているので、その一部を次

(B) 各図版の内容とねらい(欲求と圧力)

圧 力			図 版 (仮 称)	欲 求		
c	b	a		a	b	c
不疾罪 安患	災不欠 害幸乏	養獲確攻拒 育得得撃否		遊欲確獲認 び食保得知	愛自己親 情願示擊助和	伝達
		××	練. かくれんぼ	×		
	×	×	1. お や つ	××		
		×	2. お ん ぶ		×	
	×	×	3. 紙 芝 居		×	×
		×	4. おくりもの	×		
××	××		5. ね ど こ		××	
		×	6. 相 撲	×		×
×			7. 孤 独			
×		×	8. 野 球	×	×	×
			9. お 話	×		
×		××	10. 食 事	×	×	
×		×	11. 夜		×	×
			12. 遊 び	×	×	×
	××	×	13. お 店	×	×	
			14. 電 話		×	×
		××	15. 泣 く	×	×	

〔註〕 ×印は各図版における予想される欲求や圧力を示す

圧力 { a. 人的圧力  
b. 環境的圧力  
c. 内的圧力 } 欲求 { a. 外的事象への欲求  
b. 対人的欲求  
c. 圧力排除の欲求 }

に掲げておくことにする。  
三、選択し決定された図版を各要素別に分析してみると次のようになる。  
(a) 環境構成の面から  
家庭を場面にとつたもの  
集団の遊び(幼稚園などの)  
近隣社会を場面にとつたもの  
個人的な場面  
(b) 対人関係から  
父母に対するもの  
目上の人(教師や大人など)に対するもの  
同胞(兄弟姉妹)に対するもの  
友人に対するもの  
孤独のもの  
尚これらの各図版を欲求や圧力の面から表示すると次の表のようになる。

(尚これらの図版や実施手引検査用紙などはこのたび次のところから出版されましたのでつけ加えておきます。)

神戸市須磨区平田町一の六六

教育文化社



# 幼児用絵画統覚検査(RCAT)の

## 適用事例について

(頌栄短期大学) 西本 脩  
 (芦屋市児童教育研究所) 山本 真市  
 (西宮市上甲子園小学校) 吉井 忠生

(目的) 前述のような目的と意図のもとに、新たに作製した幼児用絵画統覚検査(RCAT)について、その検査結果の分析法および解釈法を事例にもとずいて述べ、あわせて、この検査の妥当性について検討しようとする。

(分析の方法) 被検者が各図版に対して述べた十六の物語の一つ一つについて、その内容を次のように分析する。

1. 主人公 物語の中心人物は誰か。
2. 主人公の欲求と行動、物語の中にある主人公の中心的欲求は何か。又その欲求の対象は何か。

### 《欲求・行動の種類》

- 獲得・確保・飲食・認知・遊び・無活動・挽回・愛情・親知・救助・養育・自己顕示・伝達・拒否・攻撃・圧力排除
- 3. 圧力およびその源泉
  - 獲得・確保・養育・支配・拒否・攻撃・災害・運命・不幸・欠乏・疾患・挫折・身体的不全・心的不全

各 図 版 別 欲 求 ・ 圧 力 出 現 頻 数 表

心身挫不安疾運災不欠支養獲確拒攻 的体的的不全全折(恐怖)患 命害幸乏配育得保擊否	欲 求		遊欲確獲認無挽愛自攻救親伝養拒 活 己 力 活 顕 排 び食保得知動回情示擊助和達育否除															
	圧 力	図 版																
		練かくれんぼ	*		3	3					2							
		1 おやつ	*9*4					1	1									1
		2 おんぶ	1						*2	10			4					1
		3 紙芝居	1						*9									3*5
		4 贈物	8		*7	2												
		5 寝床	4			1		*1	*									1
		6 すも							*									*
		7 孤独								1	1							2
		8 野球	*7		1				*2	2								
		9 お話						*4	1		4		3					1
		10 食事	3*5					*										1
		11 夜	1		1	1		*2		*6	1							4
		12 遊び	*2		1			*					*4	3				*
		13 お店	*1		*18			*										
		14 電話	1		1			*					2					*
		15 泣く	*2															*

註 \*印は出現を意図した欲求・圧力を示す。  
 数字は幼児 35 名中の出現頻数を示す。

(解釈の方法) 被験者がこれらの絵に対して作った物語は、そのときその絵に関係させながら、被験者がその絵を通して自己自身を表現したものである。それ故、われわれはその物語を通して、彼のパーソナリティー(人格)を知ることができる。

前述のような方法で、一つ一つの物語について分析せられた資料を綜合して、一つの総合的な解釈をする。その際、次の諸点について留意するとよい。

1. 主題―物語の主な内容(一枚の絵から判断するよりも、数枚の絵から判断して、それらに共通に見られるものを見つげ出す)
  2. 主役(物語の主人公)―物語の中の誰に、自己を同一視するか。
  3. 何として見られるか―事物を如何に見、これに如何に反応するか。
  4. 誰に同一視するか―家族中の誰に同一視するか。
  5. 画面にない人物・事物や環境の挿入
  6. 無視された人物や事物
  7. 物語の結末―物語の結末が幸福かどうか。
- 尚、この際、被験者のケース・スタディー(事例研究)によって得られた色々な調査資料(例えば、生育史、家庭環境調査、知能テスト、性格テストなどの結果)も綜合した上で、被験者のパーソナリティーを診断することが大切である。RCATの結果のみで、直ちに解釈や診断を下すことは、独断的になるおそれがあるから、避けなければならない。

(この検査の妥当性) 各図版について、幼稚園児および保育所幼児

三五名に予備実験を行った。その結果、四才以下の幼児の場合は、断片的な絵の敘述に終始して、自己表現のみられないものが多かった。五才以上の幼児の場合は、たとえ断片的な反応であっても、若干の質問を補足すれば、その分析が可能であることが判った。

今、これらの幼児の反応を、主人公の欲求―圧力の面から分析して表にすると、次表の如くなる。

この表によって、われわれのねらいとしたところと、予備実験の結果実際に得られたところとを比較すれば、大体妥当なものと考えることが出来る。

(事例)

1. T、M、男児、六才五カ月 保育所児
2. 問題点(保母の訴え) 乱暴。いたずら。友達をはじめめる。保母を独占したが、よく保母のまわりへくっついてくる。落つきがない。
3. 生育史および家庭環境 父パン屋、喫茶店経営。母も同喫茶店の仕事に従事。父はやさしいが母はきびしく叱る。小学校五年生の兄と、四才の妹あり。本人はずっと夜尿のくせあり。そのためか睡眠が浅い。
4. RCATの結果

(図版2の物語)「お母さんにおんぶしてもらいたいなあと見ています」

(分析) 救助・愛情の欲求。対象は母。

(図版3の物語)「紙芝居を見ている」「仲のわるい子がいて、いじめられるから、こわくて見られない」「家で本を見て遊ぶ」

## 遊戯操法とC・A・Tによる

### 診断と指導

松本市立松本幼稚園

加藤 清子

(分析) 圧力排除の欲求。対象は友達。攻撃の圧力。源泉は友達。  
(図版5の物語) 「ねている。」「日曜日の朝お母さんのねている間に起きて遊ぼうと思つて、ソーツと出て行く」「後でお母さんに叱られた」

(分析) 遊びの欲求。攻撃の圧力。源泉は母。

(図版7の物語) 「こわいから走って帰っている」「お友達と遊んで遅くなった」「お母さんに叱られるだろう」。

(分析) 不安の圧力。攻撃の圧力。源泉は母。

(図版11の物語) 「お母さんに叱られて出された」「夜遅くまで遊んだから」「後でお迎えに来てくれて、晩ごはんを食べてねる」

(分析) 罪の圧力。源泉は夜遊び。攻撃の圧力。源泉は母。

(図版12の物語) 「砂場で遊んでいる」「いたずらするから遊んでくれない」「先生に云いつけた」「よい子になってなかく遊ぶ」

(分析) 伝達の欲求。対象は先生。拒否の圧力。源泉は友達。

#### 5. 解釈と診断

右記のように、各図に対する反応を分析した結果を綜合して見ると目立つことは、母親および友人からの攻撃の圧力が非常に強くはたらいっていることである。したがつて、この母親は、本人にとつて「非常にこわいもの」という風に印象づけられ、本人はその強い圧力による欲求不満の状態にあるように思われる。本人の色々な問題行動の原因が恐らく、母親および友人からの圧力による欲求不満の結果によるものと思われる。また本人は母親の愛情を求めており、保母の愛情をも求めていることが、その物語から判る。

1 目的 子どもたちのかくされている心の世界を外面化し、教育の実際に役立てるため、実験方法として遊戯操法とC・A・Tを用い、併せて二つの実験の関連性をも捉えようと試みたのである。

2 被験者 お茶の水女子大学附属幼稚園六才女兒十二名

3 実験期間 遊戯操法 昭和二八年六〜九月

C・A・T 同 二九年二〜三月

4 遊戯操法 (Play Technique) 刺戟の少ない部屋に二枚ののぎを敷き、大・中・小十数個の人形と、ままと道具類を用意し、つれてきた二人の幼兒に二枚ののぎがそれぞれの家であることを知らせ、自分達の家族数だけの人形を選ばれて、三〇分間ままと遊びをさせた。人形、すなわち家族の人々の活動のさせ方の中に、幼兒の外面化されない世界が投影されるだろうという想像は、ほぼ裏切られなかったようである。

図表Iは、実験の結果を処理した一例で、人形の活動のさせ方を示したものである。大部分の子どもが母中心で、母子関係をよく用

図表 I 人形の使い方を五類型にまとめた場合

類型 \ 幼児名	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L
父母を使う型	○	●				○					○	○
父子関係を使う型			●			○		●				
母子関係を使う型		○	●	●	●	●	●	●	○		●	●
子ども間関係を使う型	○	○	○	●	○		○	●	○			○
自己の関係をを使う型	●						○		●			

いた。つぎに配布した調査用紙などによって家庭の状況を、先生に訊ねて幼稚園の生活をそれぞれまとめ、実験場面の結果の三方面から幼児を考慮したもの一例が、図表Ⅱの(1)・(2)におけるF子とK子の例である。

なお、日常生活では子どもたちは外界のものに動かされやすいが、ここでは自分が指導者となって自分で周囲を変えることが出来るわけで、大きな教育上の意義が考えられる。

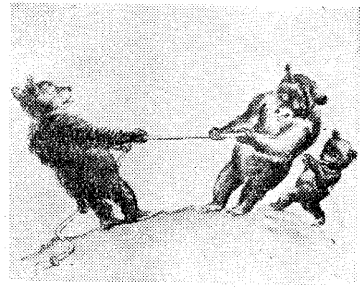
5 C・A・T (Children's Apperception Test)

ベラック (Bellak, I.) の十枚の図版を一枚づつ子どもに見せて、「この絵は今、何をしているところか、この前にはどういうことがあったか」

を語らせるのである。子どもたちは、絵の中の場面に自分の生活を投影してお話をはじめた。図版2の「熊の綱引き」について二人の幼児が語った大略は、

K子「親子三人の熊が山で遊んでいて綱をさがし、綱引きを始めた。綱が余っている方が父で勝つ。父は「よかったよかった」と喜び、母と赤ん坊は「やだわ」という。三人は家へ帰って夕食後母は

(熊の綱引き)



子を寝かす。父は、ホールで新聞をよむ。

F子「父母が家から綱を持って来て三人で綱引きを始めた。お昼頃に父と子の方がようやく勝つ。母は怒ってどこかえいってしまふ。父は、「厭だなあ」という。K子からは、ほほえましい家庭風景がうかがわれるのである。特に自分の赤ちゃん熊と見做しているこ

とは、どこまでも甘えたい気持を示している。遊戯操法の家庭調査によっても明るい家庭で充分甘やかされて育っている、くったくのなご子で、綱引きは家庭のレクリエーションで、父の勝つことも当然のこととして素直に認めている。F子では、一人の方を母と見做したことは特異な例で、綱引きからは、父母の反目が想像されまふ。語られた他の図版にも、母への反感が多く示され、自尊心の強すぎる母を余り好きでないという性格の淋しい子である。

なお、幼児の語った内容は、適宜に改訂附加したベラックの分析表に記入し、診断に用いることにした。一般に Projective Technique は、実験結果の解釈が極めてむずかしく、高度の熟練を必要とするので、私どもは個々の事例の解釈を行うための研究会をつくり、この技能の不充分さを補い、解釈の主観的になることをさげょうとした。

6 診断と指導 以上二つの実験からとらえられたものは、

図表Ⅱ

	実験場面に現れた行動・態度	家庭におけるもの	幼稚園におけるもの
(1) F 子	①自分に可愛い人形をあてる ②父の人形より母人形が大きい ③父が台所をする ④母が赤ちゃんを可愛がる ⑤動物を家族のように扱う ⑥遊びに行く・買物に行く・自動車にのる ⑦お誕生日だと仮定する ⑧ものの上で遊ぶ ⑨遊びの中にとけこんでいる ⑩創意がある	①自己中心的・一人でじつとしていることが好き ②母が一ばん好き・家庭の中心は母 ③父が時々おいしいものをつくる・母が病弱 ④赤ちゃんがほしい(本人にきく) ⑤仔犬がほしい(本人にきく) ⑥父母共よく出かける ⑦お誕生日だけに友だちを招く ⑧あとかたづけをよくする ⑨本読み、ピアノなど物事に熱中し興がのると食事に呼んでも返事もしない ⑩人形あそび・ままごとを好む 母が理智的(先生にきく)	さびしい性格 ⑧あとかたづけをよくする・しっかりしている ⑨ものごとに熱中する ⑩しっかりした子・はっきりにしている・創意にとまじめて努力家
(2) K 子	①母が食事の仕度・片付けをよくする・客を手厚くもてなす ②母人形の使い方が非常に家庭的 ③母が赤ちゃんを可愛がる ④動物を家族のように扱う ⑤あとかたづけをよくする ⑥工夫する ⑦遊びの中にとけこんでいる ⑧家庭的で細やか ⑨大人びた仕草をし、人なつこい	①実母は昨年病死し継母であるが子どもを可愛がり家庭にもよくつくす ②家族の中心は母 ③女の子がほしい(本人にきく) ④犬をかいたい(本人にきく) ⑤かたづけを時にマしない ⑥工夫する ⑦人形あそびを好む 時々でためをいう	⑥あそびの集中度は浅い ⑦母が病死したためまわりのものにふびんがられ可愛がられて育ってきたためもあり人なつく大人表情をよみ、ませて調子がいい、大人の世界の一面にふれている

(同番号は各場面の関連を示す)

- (1) 人間関係におけるもの。  
 家庭における幼児の位置、つまり、幼児が家族をどうみているか、また、どう扱われているか。  
 (2) 要求阻止 (Frustration) の発見  
 遊戯療法では、不満の対象の対象の人形を、打つ・投げる・無視 する変な人形をあてる、などによって。  
 C・A・Tでは物語の中に要求・不満・反感などを示すことによって。  
 (3) 家庭の態  
 とくに遊戯療法でとらえられた点。  
 (4) 対人関係における行動中に表現される性格並びに能力の一面。  
 とくにC・A・Tによってとらえられた点。  
 (5) イ、過去・現在・未来の時間的流れの上からの巾広い診断  
 ロ、語られる十枚から一つの傾向の把握。  
 ハ、想像力・観察力・表現力などの素質的なもの。  
 ニ、子どもの全人間的なもの。  
 ホ、適応性の有無。
- (図表Ⅲの(1)・(2)遊戯療法とC・A・Tにおける表出と、その指導を示したものの一例です。)  
 これらのことから家庭及び幼稚園における人間関係をどのように調整したらいいかが考えられる。

図表Ⅲ

	遊戯操作と C. A. T に共通して現れたもの	遊戯操作にあらわれたもの	C. A. T にあらわれたもの	
(1) F 子	その他 人間関係のもの おの 開ける 関係 のもの	母は父より優位な位置 本人は性格が淋しい・甘えっ子 交友場面が多い	創意にとむ 物事に熱中する ものしまつが良い 父母が外出好き	父に同情的 母に気に入られようと努力する 自己の優秀性を自覚している
	要求と ラシ ショ ン ブレ	友だちと遊びたい	赤ちゃんがほしい 仔犬をかいたい	家庭で抑圧されるものが、時々攻撃的な形として表現されながらも本人の聰明さのため内攻する
(2) K 子	今 後 の 指 導 方 針	生活領域にひろがりをもたせたい 交友関係をひろめ、明るくのぼしたい	創意・集中度のふかさ・きまりのよい点などそのままのぼしたい・動物飼育などで愛情と明るさをあたえたい	家庭における抑圧の排除 人間関係の調整
	その他 人間関係のもの おの 開ける 関係 のもの	甘えっ子・自己中心的 大人の歡心をえようとする でためめ・きまぐれ・散漫・くっ たくない 要領がいい	家庭的で細やか 人に対していねいでやさしい・ 思いやりがある・大人びた仕事 をし人なつこい 工夫する	家庭が明るい ほほえましい表現が多く言葉のも つニュアンスのおもしろさは大き な収穫であった ずるさがある
	要求と ラシ ショ ン ブレ	みとめられたい 愛されたい	女の赤ちゃんがほしい 犬をかいたい	愛されたいとくに 両親をはさんで兄妹間の対立が大 きい
今 後 の 指 導 方 針	正しい態度で子どもを可愛がること の必要性を痛感 でためめを正しく汲みとり情操方 面へむけてのぼしたい	ままごと遊びのように本人の集 中する素材をあたえて集中力を 伸ばしたい		

これらの実験を通して、今まで何気なく看過した子どもたちの遊びを手掛りとして、外に現れない無意識の行動を判断し、日常生活の中で多少によらず押えられている不満や要求を見出し、それを治療し、正しい方向へむけてのぞましい成長をはかることが必要で、これを如何に実際の生活の中に生かすかが今後の関題である。

### 幼児・児童画統覚検査について

お茶の水女子大 浜田 駒子

私は、いま発表なさいました加藤さんの後をついで、松村康平先生につき、ベラック版 C・A・T について研究した。

これら十枚の絵で果して子どもの性格がとらえられるかどうかという疑問から出発したのである。

C・A・Tを行ったのは、

お茶の水女子大学附属幼稚園六才児 男女一〇名

太田区昭和幼稚園六才児 男女五名

同 外人児童でありました。

絵画統覚検査については先程 R・C・A・T を発表なさった方がくわしくお話なさいましたので、省略させて頂きたい。ここでは上記の結果からベラック版 C・A・T の限界(短所)をスライドをみながら簡単に説明申し上げることにしたい。

①まず、練習版のないこと。

②絵の書き方がリアルでヒヨコをカエル・カラス等と見ており、図版の意図にそわない。

第1図版

③日本人の生活様式と図版に描かれている様式とちがう。

食事の方法

ベット

トイレット

④⑤Xをねらった図版にそうした反応はなかった。

第Ⅴ図版 第Ⅵ図版

⑥全体として動きのある絵が少ないが、やはり反応のよくおこなわれたのは場の重なりをもつこの二つであった。

第Ⅱ図版 第Ⅷ図版

⑥主人公にいろいろな動物が登場するので同一化しにくい。

子どもの見方と、母親の見方のズレが実際の保育に大きく作用している場合は多々あります。私はこのC・A・Tをつかって母親の認識構造をかえる試みをしてみた。

対称は先に行った子どもの母親で

方法は一回目を子どもと同じ方法で行います。二回目は、それはあなたのお子さんはどうみただしうかと質問し、母親の立場の転換がただだけできているかを見、三回目に子どもの反応を知らせるのである。ここで母親は、

○自分の反応と、

○母が子の立場での反応と、

○子どもの反応

の三つを考えてズレとか一致とかを見出し、アアソウカという体験をするのである。例えば、

第八図は猿が応接室でコーヒーをのみながら話をしてしていると

ろ、ねらいは家族におけるその子どもの役割りをみるものである。

子どもはこれをおいしゃさまとみたり、左手のサルを見弟とみたりさまざまであるが、

母親たちは、一名をのぞいて全部

「お客さまがいらっしやってお母さんが、子どもはうるさいからあちらへ行ってらっしやい」といっているところだと反応しました。

「あっちへ行っていらっしやい」という会話の中に家庭での子どもの扱い方がうかがわれる。

母親A「静かにして居られるのならいいですよ。出来ないと思ったら外で遊んでいらっしやい」

母親B「お客様ですからあなたは外であそんでいらっしやい。こどもは不平そうに出て行って、戸口で自分の存在をしらせるようにドタン、ドタンとドアに駄をぶつけています」etc.

お母さんは本当によるこんでこのアアソウカ体験に参加してくださった。そして祖母と母親との保育上の問題がその子の反応にあらわれたり、いつも自分がこどもに云っていることがたりすることから、それに関連したいろいろな質問をしてくださった。

このたび、C・A・Tの日本版ができました。

(戸川・松村・本明・小島作成)

これはベラック版の欠点をのけ、日本の文化様式に適して、より反応しやすいように心がけてつくられたものである。

一つの例を挙げれば、ベラック版C・A・Tはいろいろな動物が登場したが、日本版C・A・Tは他の動物とともに、リスはどの図版にも必ず登場させ、又、どれになりたいかをきいて、自己同一

化を確認するようになっていた。先程発表の方は兎のみに統一した  
そうで大変結構であるが、日本版C・A・Tがリスを用いたのは兎  
では親しみやすい点がかえって欠点になりはしないか（昔からの話  
の中にもうさぎはよくでくる）ということからである。

他の動物を登場させたのもトラでさえもやさしく反応することも  
あるからである。

時間があれば、日本版C・A・Tの結果をも申し上げるのである  
が、今回はベラック版C・A・Tの限界を申し上げ、更に新しい方  
法として母親のアソウカ体験についてお話したわけである。

## Finger-painting (2052)

—保育しにくい幼児に施行せる結果—

大阪市立大学児童学研究室

小西勝一郎

並河信子

### 1. 目的

指絵の治療的効果については、すでに多くの研究があるが、我々  
は幼稚園で保育しにくい幼児に指絵を描かせ、指絵が幼児の行動に  
いかなる効果を及ぼすかを明らかにせんとし、次の如き手続による  
研究を行い、併せて彼等の指絵の特性について分析を行った。

### 2. 手続

研究の対象は、大阪市立日吉幼稚園及び私立堀江幼稚園に於て、  
担任教師によって最も保育しにくい者として選ばれた一七名（平  
均年齢6.26 $\pm$ 0.31年、平均I・Q100.48 $\pm$ 13.32以下E群とする）  
及び之と比較するため選んだ保育し易い幼児一七名（平均年齢6.26  
 $\pm$ 0.40年、平均I・Q112.76 $\pm$ 9.26以下C群とする）である。

指絵の効果を判定するために、実験の前後に幼児の行動を評価す  
るよう担任教師に依頼した。（評価は幼児指導要録についている行  
動評価表による）

保育しにくい子供として選んだ理由として、教師によれば内向  
的、消極的、無口、依頼心が強い、注意散漫、我儘、攻撃的、自己  
中心的、共同生活の秩序を乱す、落着かない、神経質、喧嘩をよく  
する、興味がかたよっている等があげられている。

E、C両群中夫々九名（F群）に対し、一週間間隔で一枚ずつ継続  
的に指絵をかかせ残りの幼児（non E群）にはかかせなかった。

今回は実験に先だって、保育室において、全園児に一度だけ、指  
絵の経験させ、実験中はとりたてて説明しなかつたことと、指絵  
具は無意配列した赤黄緑青茶黒及び紫の七色を用いた他は、描画の  
手続はすべて前回に準じた。

なお一人の幼児の描いた指絵の合計は、病氣其他の理由で必ずし  
も一致せず、最低四回から最高七回であった。

期間は一月から三月迄である。

### 3. 結果

#### 1. 指絵の効果について

整理として先ず担任教師によってなされた行動評価の各項目は三



段階に品等されるから、之に応じて「1.0.1」の得点を与え、各カテゴリー毎に合計点を求める。次いで各々四群について前後二回の行動評価平均得点の差を求め、更に此の差について各カテゴリー毎にE F群とE non F群、C F群とC non F群、E F群とC F群、E non F群とC non F群の差を算出したところ次の結果が得られた。

E F と E non F 両群間の差は各カテゴリーについて「社会生活」を除いた外は正の数値を示し、C F群とC non F 両群間では、カテゴリーの半数に（身体、仕事の習慣、社会生活、自然）負の数値が認められる。このことは、他の条件が同一と仮定する限り、保育しにくい幼児と保育し易い幼児に継続して指絵をさせた場合、前者に対して、はるかに効果が多く、後者に対しては寧ろ負の効果があることを示すものであり、Lowenfeld の説を肯定しているものとも考えられる。我々は幼児に指絵を与える時、なお検討されるべき多くの問題を持ち、これを無批判に受入れることは望ましくないのであろう。

E F群とC F群、E non F群とC non F群間の差については、「健康習慣」のカテゴリーを除いて全て正の数値を示している。共に保育しにくい群が進歩の率が大きい。これは、保育しにくい幼児に対して教師の保育努力がより多くなされ、その効果のあること、此等の特性におけるE群の成熟の程度の高いこと、或いは指絵がC F群に阻害的效果をもつこと等に基因するものであろう。

2. 保育しにくい幼児の指絵の特性について描画枚数は子供によって一致しなかったから四回迄のものについて、両群を比較検討し

たところE群の特性として次のものが見出された。

- a 最初に使用する色彩は紫が多く黄が少い。
- b 人差指のみで描き、手の他の部位を用いないものが多い。
- c 湯、手拭の使用が多い。
- d 同じ構図内容に固執するものが多い。
- e 壺より取り出しした絵具を塊のまま紙面に残しておくものが多い。
- f 描画時間は稍短かい。

#### 4. 結 論

幼稚園の保育しにくい幼児を対象に指絵を継続的にかかせ、その治療効果並びに指絵の特性を明らかにせんとした。

指絵は保育しにくい幼児にとって望ましい効果をもつが保育しやすすい幼児には必ずしもそうでないことが暗示され、保育しにくい幼児の指絵の特性として若干のものが見出された。併しながら我々の研究は対象が極めて少く、短期間であり、統計的検定を行っていないこと、保育しにくい幼児の型、原因について分類していないこと、教師の行動評価について信頼度を調べていないこと、群のわけ方その他整理の方法等に検討すべき点が極めて多く之等については更に将来の研究にまちたい。

# 幼児における Group Therapy

## (集団心理療法)

(愛育研究所)  
森脇 要  
権平 俊子

我々は幼児の人格の問題を解決する為に直接に幼児の人格に働きかける方法として、集団心理療法を実施した。このグループは治療者一名、治療を受ける幼児四〜八名からなり、禁止をしないで、出来るだけ庄力のない自由な雰囲気を作り、治療者は幼児の中心にならず、背景にしりぞいて、幼児達の能動的な活動や交渉を多くするように努力を払い、幼児の喜ぶ玩具を置いて自由に遊ばせた。治療は週二回、一回の時間は二時間である。治療の方法、経過の検討については、四月に日本心理学会で発表したもので、ここでは省き治療効果のあった一例につき経過の報告をする。

N・K・昭和二十四年三月二十四日生、幼稚園で三月余いても皆の前で話をせず、人になれないで、何もしないと主訴で、幼稚園の先生付添いで母と共に教養相談に二九年七月六日に来所した。その折知能テストは、先生に抱かれて入室したが全く要求に応じないで暴れる。積木や絵本を与えても使おうとはしないで、机の下に投げ捨てたり、先生に噛みついたりする。二〇〜三〇分後菱形を書いた

が非常になげやりな書き方をし、長方形構成の問題も始め一回だけしたが次にわざと違う形を作る。途中先生退室、少し暴れたがすぐに大人しくなるもテストには応じない。一〇分休憩後、絵合せにはすぐ応じたが後はしない。暫く室内を歩き廻って自分勝手な悪戯をするが名前を字で書く。テストは全部出来なかったが、おくれない事は判った。(昭和三〇年三月一日 I.Q. 129) 幼稚園は一年保育で入ったが、どうしても母親から離れず一月後から無理に離して父が幼稚園の門まで送る。母から離れた後は先生に縋りついて離れない。又噛みついたりする、皆の前では何もしない。別室ではよくして、食事も別室でよく食べるが、皆の前では先生が食べさせると口だけあける。家では客があるとはしゃぐ、母をつねる。客には話しかけられても答えない、母が云うには普通の時は別に変化はなく、絶えず他の人に気が散っている。一人で留守もするが、友達には衝動的に振舞うとの事である。父は大学出身の商事会社勤務、三四歳、母は高女出身三〇歳、兄が三カ月で肺炎で死亡、弟二歳六カ月がある。N・K・は母のジフテリア中に二〇日早く生れ、本人も感染して重体になった。混合栄養で離乳二歳、生齒稍遅く、始歩一カ月、始語一〇カ月、扁桃腺炎を一年に二〜三回やるが別に大きな病氣はしない。生後現在まで八回転居している。

九月一七日よりグループに入り治療を始め、引越しの為、幼稚園を退園した。治療中の行動の変化をみると、第八回までは母親から離れないで、積極的に遊ぼうともしない。他の幼児も殆ど相手にしなかった。第九回、幼児二人がN・Kの弟をいじめ、又N・Kに鉄砲をむけた。これを機に母から離れて外にも出る。第一〇回始めて母

N. K. の治療中の行動の変化

治療回数	母親 離れない	から 離れる	ねころぶ 床に坐る	治療者は 生息を許す がりつく	友達の手を 握る	一人遊び	並行遊び	協同遊び	母親の傍で	床に座つて 居る時	椅子に すがり
1	2										
3	4										
5	6										
7	8										
9	10										
11	12										
13	14										
15	16										
17	18										
19	20										
21	22										
23	24										
25	26										
27	28										

から離れ入室したがそれと同時に寝ころぶ、お八ツも寝ころびながら食べる。第一一回寝転び、お八ツも寝ころんで一人で食べる。第一二回床に座りお八ツも隅で食べる。幼児M・Sの求めに応じて皆が入れないように戸を押えて「面白いな」と云う。始めて協力的行動をする。第一三回相変らず寝ころんでいる。治療者の足をつねったり乱暴をする。お八ツを犬の真似だと云って四ツ這いになって食べる。第一四回友達の外に出るか問うと始めて答える。円テーパーにつきお八ツを食べるが半分は床に坐ってする。治療者にまつわりついているが、S・Kと相撲をしこれを機にままことに加わり、S・Kと追いかけてもする。始めて遊びに加わる。第一五回一人の間ではあるが、始めて描画、自分の画を貶す。床にねころび治療者に乱暴をする。S・Kと話を始める。お八ツ始め床に座りこんでいるが後テーパーで食べる。K・Sと積木遊び、自分の作ったのを自慢する。自ら友達と接するようになる。第一六回治療者に対する乱暴は前回よりひどい。寝ころぶ治療者の注意をひくようなことを云いながら椅子に座ってお八ツを食べる、始めていない子の名前を云う。一人離れて積木、第一七回治療者に乱暴をし、寝ころんでいる。積木の箱を開けるのを治療者に云われて手伝う。お八ツはねころんで後治療者の膝の上で食べる。椅子を頭にのせて背を追いかけて喜ぶ、第一八回寝ころぶ、治療者の膝の上の。お八ツは腰かけて食べる。ひどく自分ではどうすることも出来ない程かけ廻る。第一九回一カ月余休んだが変化はない。寝ころんで治療者に乱暴をし、すがりつき頬づりをする。椅子に坐ってお八ツを食べる。K・Sのひくオルガンを下手だと貶す。協同遊びをしない。第二〇回一

人であるため嫉妬がないのか、治療者にまつわりついたりねころぶことは無い。お八ツも落着いて食べる。第二一回友達や治療者の注意をひくような行動をするが注意が向かないとねころぶ、前回ちゃんと食べたお八ツを床にはったり治療者にもたれて食べる。二人のままごとに関心を示すがグループに入れない。第二二回少し部屋を無意味にかけ廻り、ねころぶ、治療者が入室すると来て帰ると云う。お八ツは着席して食べる、進んで遊ぼうとしない。第二三回治療者に乱暴をしたり、治療者の頬をなでたり、自分の頬をあててにっこりしたり胸に手を入れたりする。お八ツは着席して食べる。治療者退室後、始め並行遊びであったが、建設的行動になる。第二四回治療者は原則として入室しない事にする。グループに近づくこととする積極性が認められるが、グループには入りきれない。お八ツは自分で椅子を運んで腰かけて食べる。空箱の押しごっこは友達とじゃけんて順をきめ完全にグループに入る。第二五回グループに入りたいがすぐに入る事が出来ない為か友達の注意をひくような行動をする。少しさそわれて遊びに加わるが完全に入りきれない。お八ツは着席して食べる。少し皮肉やいたずらをするが相手にされない。第二六回Sのリードに従って遊ぶ。第二六回すぐにはグループに入れないが自ら友達に話かける。お八ツは着席して食べる。三人で電車ごっこ楽しそう、稍興奮的、第二七回すぐにグループに加り、一心にK・Sのリードに従う。少し乱暴するが友達にさげられてよす。全くグループに入り電車ごっこ。治療前に知能テストをしたが、大へんよく要求に応じた。第二八回余りグループ遊びに入っていない。友達に求められればそれに応じる。終にM・YとK・Yが

積木の箱に入っている上に積木を入れて喜ぶ。

以上二八回をもって治療を中止した。治療中の異常行動はなくなり、家でも友達とすぐ遊べるようになり、小学校入学時のテストも一人であちゃんと受けたという。又小学入学後も特に異常行動はない。治療中の行動から見て、自分に常に愛情をかけてもらいたいという欲求の現れと考えられる、兄の死も後すぐに生れた上に生後病気で重体になった為大切に甘やかされて育った。そこに弟が生まれ、弟は可愛い顔であり、両親は知能も遙かに優れていると思つて居り愛情が弟に向けられた。N・Kは弟に嫉妬を感じ、又愛情不足を感じた。母が友達を選好みした上に転居を八回もしたので友達もなく、弟相手の遊びが主であり、友達に接したい欲求があった。行動だけみると知能が劣っているようであるがIQは129ですぐれている。欲求不満を起している点、即ち彼の欲求する事を受容しなかつた為と考えられる。治療者に抱かれ、乱暴し、絡みつく等の事により、欲求を充したとも考えられる。又後半幼児が少く、グループに入りやすく、他の子供も却つてM・Kを誘い入れ、友達と遊べた事も治療効果が上つたと考えられる。

## 一 施設幼児の社会性の研究

日本女子大学

児 玉 省

石 井 雅 子

高 橋 昱 子

この研究の対象は東京近在にある一公立の児童養護施設内の三歳乃至六歳の幼児四八名である。もっと広汎な施設児の所謂施設病の研究の一環として行った研究で、明日（五月二十二日午後）報告される保育学会共同研究の中の社会性の研究に使用された社会性調査票を使用した。施設の御好意によって、その直接子供たちの養護に当っておられる保母さんその他の方々の約一カ月間の御協力と、かつ本研究者たちが四泊五日、子供たちと生活を共にして調査した。

この施設は神奈川県下にあるが、東京の施設の一分室で、かつ大部分東京の子供たちを收容しているもので、学会の東京都の子供たちの調査の結果との比較を試みてみた。以下、両方の子供たちが、多少著るしくちがっているとと思われる点を引き抜いて考察をする。

施設児には、「母を求めて泣く」は普通の子供たちに比べて非常にすくない。これに反して、「他の子供にいじめられると泣く」「かわられると泣く」は非常に多い。また「大人にからかわれると泣く」も、施設児にすくない。「一人になるとこわがる」は、施設児も普通児もほぼ同様である。「暗やみやゆうれいをこわがる」は施設児にすくない。この施設の子供たちは必ずしも貧しい家庭の子供たち、またはとくに母親のない子供たちではない。それで前述の事実は母のない環境への適応ができていることを示すものか。他方子供同志の間の関係の絶対量が多いからかも知れないとも考えられる。また多人数生活することによって暗やみの恐怖を、持ち合わせなくなっているようである。

「大人の目にとまるとすぐいたずらをやる」「しかられぬように気をくばる」は施設児も普通児もほとんど差がない。しかし、「自分のしたいことがほかの子供に邪魔されるとおこる」は施設児にはるかに多い。これらの点も前述したところと似ていて、施設児の方が子供同志の関係で、泣いたりおこったりすることが多いのに比べて、対大人との関係では逆にすくない。また、子供同志の関係で、「わがままである」は施設児の方が高率である。これらの点が、施設児の性格を暗示する何ものであるようである。要するに子供同志の間の関係に問題がある。これは、子供同志の間の関係数が多いという理由だけでは片づけられないようである。

また社会性調査項目のその他の項目について、「非常にすむ」「時々すむ」「一つもしない」の項目のうち、施設児は普通児に比べて、そのどれかに集中して、一〇〇%になってそれ以外の者がしばしば皆無である。普通児にはいつもそういう子供が多少いるのに対して、著るしい対照である。これは施設児の生活がいつも多数の子供との、集団生活をしているために起っている行動の水平化、ひいては発達における水平化の傾向ではないかと思う。ことに、「ほかの子供を誘って遊戯をはじめ」は、施設児がはるかに少ないが、集団生活をしなからこういう点がないのは、多ぜいの集団生活の圧力が、小さいグループ——即ち誰れか誘って小さいグループで遊戯を始めるような——の成立を抹殺するように作用しているのではないであろうか。多ぜいで生活をしながら、一人一人としての親しい関係が、成立し難くなっているのではないかと思う。

「ひとの上に立とうとする」「ほかの子供に母のような愛情をすすむ」

というような項目に該当する者も殆んどいない。「ほかの子供のこと」をほめて話す。「大人に云いつけずには、ほかの子供のあやまりを訂正してやる」も殆んどいない。「競争心がある」「嫉妬心がある」は施設児の方が多い。これを要するに、これらの施設児は、養護の任に当る大人の手でまとめられて、集団生活をしているが、集団内に於ける個人対個人の関係が、難しくなっていると考えることができる。ここに注目すべきことは、集団生活をしながら、「自分のしたことに責任を負う」「まかされたことを責任をもってする」が、一〇〇%だめである。

以上は、普通児と比較するために、著るしい差異を示すものを引き抜いて示したが、この調査票によってみると、施設児はいつも、普通児と比較して、おとっているとかおくられているとかいうことはできないようである。前述した項目のなかにも、一、二あったが、その他、「友達仲間から除け者にされたり、馬鹿にされたり」する者は非常にすくない。これらの点では、施設児の方がむしろ、進んでいるかも知れない。勿論これは、調査した施設についての話だけである。研究をお許し下さった施設に対して厚く謝意を表する。

## 幼児の遊びの観察

運動場における新入児と二年保育児との関係

第 2 日

名古屋大学 旭 妙 子

一、序

幼稚園の運動場とは、今まで家族と僅かの近所の子供たちとしか交ったことのない新入児が初めて同じような年の多数の子供と交わるところである。又、そこは二年児や年長児がいて、新入児が自由に遊ぶことのできないところでもある。この中に入って新入児はどのような過程を通して、今の二年児のように自由に運動場を使って遊ぶようになるのであろうか。その実態を明らかにするのが本研究の目的である。私達はこの過程を process を知ることによって、新入児を今よりも早く、無理なく運動場に、ひいては幼稚園生活全体に適応させるように指導する為の資料を得ることができるのである。

ここでは、その第一報告として、一年児と二年児との運動場における関係を観察法によって調べた結果を報告しようと思う。具体的には、一般に、一年児は自分たちだけで遊んでいる時とは、広い運動場の好きな場所でのびのびと遊んでいます。そこへ二年児が入ってくる。それが何らかの変容を受けるといふことが考えられる。それを実証的に明らかにしてみようと試みたものである。

### 二、実験手続

(1)日時 昭和三〇年五月上旬  
(2)被験者 名古屋市御東幼稚園男児(年令四〜五才) 一年児、二年児各四五名、計九〇名。

被験者のうち一年児は在園一ヶ月、二年児は一年一ヶ月を経過。

(3)観察者 名古屋大学教育心理学教室教官四名、学生一〇名、計一四名。

(4)観察場面 運動場。トロッコ二台、滑り台、ブランコ二台、安全ブランコ、ジャングルジム、鉄棒がある。広さ三八〇坪。

(5) 観察方法 被験者は一年児と二年児を一五名ずつ各三グループに分け、前者を I<sub>a</sub>, I<sub>b</sub>, I<sub>c</sub>、後者を II<sub>a</sub>, II<sub>b</sub>, II<sub>c</sub> とする。この場合各グループ間に年齢差はない。即ち、一年児と二年児の間には唯幼稚程度経験年数の差のみがある。

実験は一〜三までで、一実験に二グループが使われる。この場合、先に運動場に入るグループをA、遅れて入るのをBとし、Aのみの切面をα、A+Bの場面をβで現す。

観察時間は、Aが入って五分後から記録を開始し、一〇分経過後Bを投入、更に一〇分間の観察記録をとる。これを纏めたのが表Iである。

(6) 記録 この実験で得られた資料は次の五つである。

①自由記述法 *open ended method* による行動記録。②時間見本法 *time sampling method* により、子供のグループの結合状態(孤立していたか、他の子供と交渉をもったか、争いの有・無を、一分

毎にチェックリストに記録。③前述の①と②は各々五人の観察者が観察領域を分担して受持ち、その領域内の子供のみを観察するのであるが、それとは別個に、全体の子供の行動の移動状態を自由記述法により記録。④実験二の終了後、幼児毎に「一番良かった遊び」を尋ねたもの。⑤カメラによる特徴ある行動の記録。

### 三、結果

(1) 一年児が運動場で遊んでいるところへ二年児が入って来た場合、

表 I

観察場面	α	β
観察時間	10分	10分
実験 1	I <sub>a</sub>	I <sub>a</sub> +I <sub>b</sub>
実験 2	II <sub>a</sub>	II <sub>a</sub> +II <sub>b</sub>
実験 3	III <sub>a</sub>	II <sub>b</sub> +II <sub>c</sub>

表 II 幼児の結合状態

群 結合 実験	A*		B	
	I**	C	I	C
1	56	60	45	71
2	62	64	17	118
3	17	100	19	103

A\*はα場面のみ的人数。I\*\*は isolation, Cは Co-operation.

表 III β場面の結合

結合の種類 実験	A×B	A	B
	1	69	29
2	21	24	69
3	70	20	25

表 IV β場面の結合(回数)

結合の種類 実験	A×B	A	B
	2	21	13
2	6	12	27
3	24	9	14

表 V 争いの人数と遊具

遊具 実験	場面	トロコ	滑り台	ブランコ	安全ラン	ジャングル	鉄棒
		α	2	4			
1	β	6	2				
	α	5					
2	β	10		2			
	α	8				2	
3	β	12	10	4			
	計	43	16	6			2

表 VI β場面の争い(回数)

群 争いの 勝敗 実験	A×B			A×A	B×B
	A>B	A<B	A=C		
1			1	1	1
2	1	3		2	
3	2	6	2	1	

即ち実験二が実験一或いは三と比較して明らかに差があると認められたのは次の二点である。

(1)  $\beta$ 場面における子供の結合状態の差 これは、表Ⅲ及びⅣに欠られるように $\beta$ 場面でA群とB群の子供が一緒になって遊ぶことは、実験二お場合が一番少い。即ち、遅れて入って来る子供が同じような幼稚園経験年数をもつ子供であれば、前からいる子供と一緒に遊べるようになることができるが、経験年数が違う場合には、二つの群は夫々別個に遊んでいる。実験一と二、二と三の間の差は統計的に有意である。一年児の三グループ間、二年児の三グループ間の結合関係は表Ⅱに示したように差がない。

(2) 争いの数と群の関係 表Ⅵに示すように、 $\beta$ 場面における争いはA群とB群の間に多く見受けられた。「争いの回数」が少ない為に統計的検定は不可能であるが、見たところ、実験一と二、一と三の間に差が認められ、二と三の間には差がない。従って、このことから子供の幼稚園経験年数が長い程、争いの回数が多くなることわかる。しかし、一年児が遊んでいる所へ二年児が入って来たことよって一年児が二年児からどんな圧力をうけるかは、この実験から結論できない。それには実験二の逆、即ち、二年児の中へ一年児を入れる実験を付け加えなければならぬ。

(2) 三つの実験に共通して見られることは、争いの数は遊具の種類によつて異なることである。表Ⅴに示されるようにトロッコが一番多く、滑り台、ブランコ、ジャングル・ジムの順となっている。この順序は子供の興味の順序にも一致した。

#### 四、今後の問題(分省略)

## 家庭に於ける保育知識をめぐる問題点

名城大学 田中一成

I、調査の意味：①今日保育機関は全国的に不足している。又たとえ充分に存在するとしても教育の場としての家庭の意義は弱まるものではないこと。

②然るに家庭保育の中心者は主として母親であるが、母親の保育知識とその技術は不十分であると見られる事。

以上から次の二つの点について調査研究して見たものである。

### II 家庭に於ける保育の困難点

家庭教育上困難を感じている所を質問して ①躾、②健康教育、③性格教育、④経済関係、⑤遊びの場……の順となっている。(頁の都合により表省略)

又第二表に於ては躾の点を調べて ①我儘、②兄弟けんか、③偏食、④甘える、⑤お片付けが出来ない……の順となっており、(頁数の都合により表省略)これら各項の保育困難の訴えはその原因を三つの面に分析が出来る。①は生活環境が悪い。買ぐせ②は幼児の発達過程を親が承知していない(反抗)。③は親の愛情を科学的に処理出来ない(我儘)。そして第三の点による困難が最も強く現わ



第五表 (質 問 紙——頻 数)

種 別	年 令															
	1:0	1:6	2:0	2:6	3:0	3:6	4:0	4:6	5:0	5:6	6:0	6:6	7:0	7:6	8:6	8:6
離 乳	2	2	5	3	14	7	3	4	3							
匙 の 使 用			2	5	14	6	8	3	2	0	0	1				
箸 と 茶 碗				6	13	2	15	3	8	3	1	1				
食 事 の つ					2	2	7	0	1	2	3	0	3	1	1	5
食 事 の つ						1	9	12	5	7	3	5	3			
こ ぼ さ べ																
小 便 の 自 立					2	13	13	6	9	2	1	1				
大 便 の 自 立					1	7	16	1	9	6	2	1	0	2		

第六表 代 代 代  
20 : 30 : 40 = 1 : 1.7 : 0.5 (被調査者実数の比)

困 難 個 数	年 令														
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
30代	2.8	1.96	2.0	1.33	1.47	1.33	1.29	1.66	0.81	0.75	0.83	0.80	2.0	2.0	1.33
20代	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
40代	0.3	0.3	0.3	0.36	0.52	0.29	0.35	0.5	0.36	0	0	0.2	0	0	0.2

れている。即ち農村と都市の別なしに我儘で困っている事が一番多いのがそれを示している。

初の子の保育上困ったり失敗した事実については、健康管理と教育に大別され、両者の比は六対四の割となっている(頁数の都合により表省略)ので、若い母親としては乳幼児の健康管理はかなり困難が感ぜられているのである。この点は日本の乳幼児の死亡率が外国に比べて高い事やその死亡原因が、乳幼児の病気についての知識の不足に依るものと考えられるものが多い事からも裏付けられるのである。

次に躰の面では特に著しいのが甘やかしから生ずる我儘や依頼心の強い事である。(初の子であるからでもあろうが)。又これと反対に教育に熱心なあまり、叱り過ぎから内気な、劣等感を持った、又反抗的な子供にしたとの訴えも見られる。従って躰のむづかしさが甘やかし過ぎず、厳し過ぎぬ中間の度合のむづかしさとして表現されていると思うのである。(マカレンコとニイル)

第五表の如く基本的な生活訓練についても、多くの面で水準を下廻る状況を示しており、問題を胎んでいると思う。

第六表に於ては母親の年令層として困難(第二表による)との関係を示している。即ち第二表に困難を表明した母親達の年令を二〇代、三〇代、四〇代の三層に分けると、全体として二〇代に多いばかりでなく、困難個数の多いものほど二〇代に集中しているのがある。即ち全回答者の実数比は二〇代をひとすれば、三〇代が一・七、四〇代が〇・五となり、各困難個数に於ける各年令の比を算出すると、第六表のようになるので以上の事が言えると思うのである。

以上の点について学歴別調査の結果は明確な答は得られなかったのである。

(一〇代—一九三人、三〇代—三三三人、四〇代—九八人)

以上のように家庭に於ける保育上困難とされる点は経験の浅い若い母親を中心として、乳幼児の健康管理の知識や技術と、及び躾の点では基礎的生活訓練と、甘やかし嚴格の度合の知識技術の点を中心として困難な点が画き出されたのである。

### Ⅲ、保育教育については如何なる教育が効果があるかについて。

第一の問題点からその教育は何時、如何なる方法で実施すれば最も効果的であるか。第七表は家庭教育の知識を何処で得たか、と設問二〇項目に分けその希望項目を選ばせた結果である。(頁数の関係により省略)即ち都市と農村とはその選択項目が異っている。都市の母親は①ラジオ、②教育委員会主催の講演、③新聞の家庭欄、保健所と婦人雑誌……農村では①中学卒業までに②保健所③新聞の家庭欄④ラジオ⑤教育委員会の講演と高校の家庭科……の順となっている。農村が都市と大きく相違する所は、母親となる前に何らかの知識を得たいと言う事。中卒前に得たいと云うものが最高数であること。高校の家庭科や青年団や青年学級の活動に期待している事で、これは生活の多忙を物語るものであり、一家の主婦として、又嫁の立場として保育知識を得る時間的余裕の生み出せない事を物語っている。

農村に比較すれば、都市の母親はやや時間的に余裕が認められるけれども、然し商家の主婦は自分の自由になる時間を充分には持っていない様である。(頁数の都合により表省略)右の調査で社会学

級の利用はかなり関心が薄く、ラジオや新聞の利用希望

者は都市農村共に多いのであるが、これらの希望は現在充分には満たされていない様である。実状を見るとラジオでは

NHKではシリーズ的に幼児教育の知識を普及する番組はない。又新聞の家庭欄は新聞社によってその傾向が偏っていて、母親の保育知識の不足を補うには充分なものではない。教育委員会も婦人雑誌

も亦然りである。又保健所の活動は最も望ましい活動の一つであるが、この活動が予算にしばられてあまり活発でない事と、利用者の利用度の不

充分な点が指摘される。従って各方面の協力が要請されなければこの問題は解決されないと

思う。

故に結論としては①現代社会の貧困性から、唯一つの

第九表 (質問紙類—頻数)

地域別	方法別	第九表 (質問紙類—頻数)												合計				
		I お話のみ				II お話の質問				III 映画・ド					IV 参観・観察			
		代20	代30	代40	計	代20	代30	代40	計	代20	代30	代40	計		代20	代30	代40	計
農村部	田一方	3	3	2	8	8	17	8	33	2	8	4	14	6	11	6	23	78
	連保田	12	8	5	25	18	23	13	54	10	6	4	20	8	12	4	24	123
都市部	花保一	9	15	10	34	21	34	7	62	8	23	7	37	19	37	5	61	187
	花保二	7	13	4	24	36	51	12	98	13	19	1	23	34	40	8	82	233
	名保一	5	6	3	14	16	21	6	43	3	9	2	14	18	22	4	44	115
	計	36	45	24	14	99	145	46	290	36	61	18	115	85	122	27	208	746

二〇代—二五六人  
三〇代—三七三人  
四〇代—一五五人

修得方法に放任さるべきではなく、各種の方法がとられ、利用する母親達が自分の生活環境の中から可能な方法を選んで利用する以外に道はないと思われる。②母親は多忙で家を空けられぬ者が多いから、空ける方法を、開催者側と家庭の両方が考える事。③社会学級や母親教室の開催方法としては ①講師のお話と質問、②参観・観察、③映画・スライド、④講師のお話のみ、の順となっている。これは年令別、学歴別に於て共に同一結果となっているが、但し、学歴別では中等教育以上の者は、ⅡとⅣに多くの希望があり、小卒、高等小卒の者はⅠとⅢに希望が多い点は注目すべきで、低い学歴者は全国的に多い事を考え、又昨年愛知県社会教育課の調査で青年学級の開催方法とし、映画方式が第一位の効果を挙げている事を考え合せて、今後より多くの保育映画が製られ、映画方式を中心とする啓蒙が盛になる事が希ましい様に思うのである。

## 幼児の偏食に関する総合的研究

国立精神衛生研究所 玉井 収介  
東京家政大学 副 田 澄子  
東京家政大学 鈴木 典子

### I 研究の目的

この研究は、幼児の偏食に関して、心理的身体的両面から総合的

に研究しようとしたものである。従来この種の研究が、ややもすれば、小児医学または心理学それぞれの領域から別々に研究されていた傾向があるのにかんがみ、われわれは、心理学(国立精神衛生研究所、玉井収介)、小児医学(東京医科大学、山県信弘)、精神医学(東京医科大学、加藤正明)の三者の緊密な協同によって研究をすすめた。

われわれは、この研究において偏食児を次の如く定義した。

i ある食品を一定度以上嫌い、または好むこと、(絶対に食べない、または、それがあれば、他のものは一切たべない)

ii ある期間、少くも一年以上つづくこと。

iii 拒食、異食、大食、少食などは除く、

iv 以上の条件に該当しても幼児が通常たべないものは除く、

II 研究の方法と対象

研究は次の各段階にわかれる。

i 第一回基礎調査、対象となる偏食児及び対照群となる正常児の撰抜、および分布、食品内容、家族の偏食その他の調査を目的とする。

ii 第二回調査

第一回調査によりえらんだ偏食児群と対照群に対し、幼少時からのしつけ方に関する調査と、三日間の献立表を記入してもらったの栄養調査を行った。

iii 小児科学的検査

つづいて、両群のうちから、それぞれ若干名をえらんで、小児科学的諸検査を行った。その内容は、身体計測、体力測定、体質、罹

病傾向、検便、血液検査、血糖量、副腎、機能、自津神経系機能等である。

#### iv 心理学的検査

同じく、両群からえらんで社会的成熟度尺度、C.A.T.を行つ、なお、各国で実施した知能検査の結果も参考にした。

#### v 面接

このうち、偏食児群の中から約四〇例について本人及び母親に少くとも一回以上の面接を行つて詳細な資料を得た。

#### vi 治療

最後に、極端な数例について可能なかぎり心身両面からする治療を行う予定である。

三〇年三月末現在、Vの段階まで完了している。

研究の対象にしたのは、東京都内八カ所の幼稚園、保育所の四六才児約一〇〇〇名でありこの中から偏食児二八〇名、対照児一二〇名を得た。研究の時期は二九年四月より三〇年三月に至る間である。

### III 結果

以上、種々の方法によりえられた資料を総合して、いいうる結果を簡条書きにすると次のようになる。

#### i 偏食の分布、頻度、内容、

○偏食児は二四～五%の割合で出現し、年令、性別、親の年令、学歴住宅地別などには関係がない。

○嫌われる食品では、野菜が約半分をしめ、魚、肉の順になる。

野菜では、ネギ、ニンジンが断然多く、魚、肉では、これほどめだ

った傾向のあるものはない。

#### ii 家庭関係

○両親または家族に偏食のあるものが多いこと。

○Over protect 世話のやきすぎ、等の傾向のみられるものが多いこと。

○出生順位とはとくに関係は統計的にはみられない。

○偏食ということをも身体は栄養の点にのみ関係つけている親が多いこと。

#### iii 心身的特点

○やせて背が高く、体力にも劣ること。

○罹病傾向高く、貧血を示すものが多い。

○栄養摂取量が少い。

○蛔虫保存率には差はない。

○性格的には内気、消極的、神経質なものが多い。

○各種の神経質は習癖をもつたものが非常に多い。

○社会は成熟度も全面的に劣る。とくに、自律性に乏しく、食事の習慣のみはあまり劣らない。

#### 以下略

以上の如く、偏食という問題は決して、それだけで独立して考えられるべき問題ではなく、それ自体が一つの神経質に習癖であり、強度のものは、疾病への準備状態ともいえるであろう。

# 一年保育児と二年保育年長児との

## 身体的差異について(第二回)

千葉大学教育学部附属幼稚園長

宮内 孝

### 一、調査の目的

本幼稚園のカリキュラム作成の基礎資料を得るとともに、具体的な指導をする手がかりとする。

### 二、調査対象

千葉大学教育学部附属幼稚園々児。

### 三、調査の種類

- (1) 身長・体重・胸囲測定。
- (2) 身体充実度。
- (3) 体力測定。

### 四、調査の方法とその結果

- (1) 身長・体重・胸囲の測定。

四月と十月の二回測定したが、第一表及び第二表でわかるとおり、殆んど差異がない。ただ、体重の増減は第三表の月別体重測定表に表れたとおり差異が認められる。即ち、昨年度同様、一年保育児は

(第一表、第二表の身長・体重・胸囲測定統計表「昭和29年度」は頁数の都合により省略)

第四表 身体充実度頻数分配表(昭和29年度)

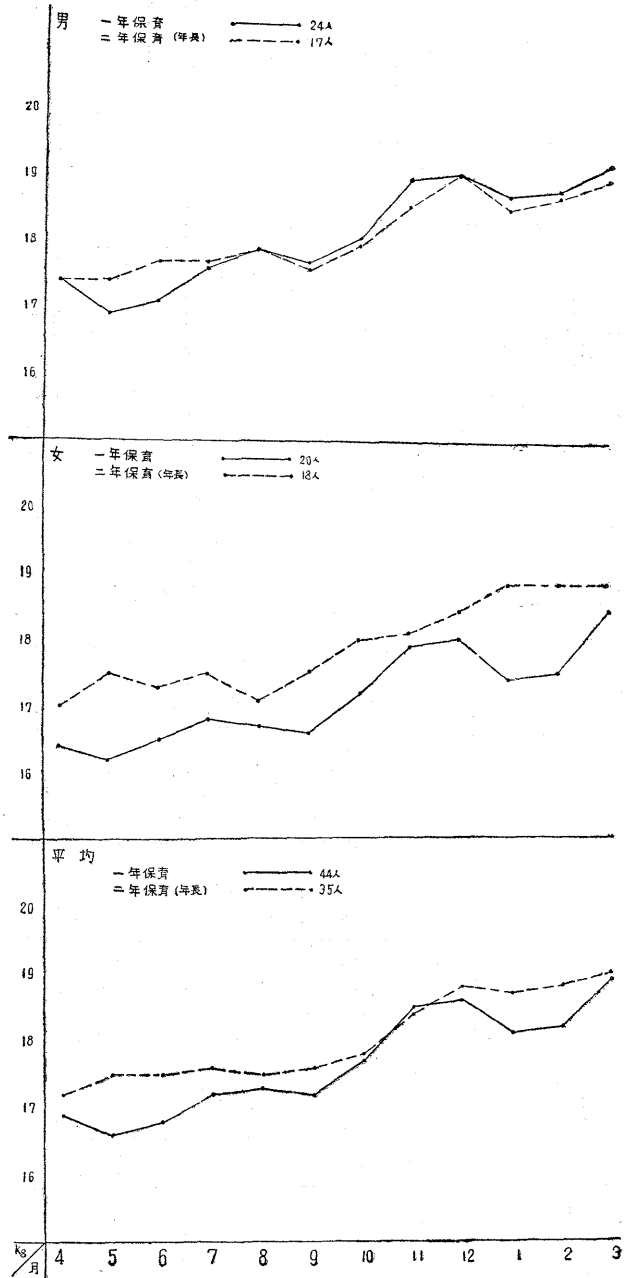
身体充実度	性別 教育年限	男		女	
		二年保育	一年保育	二年保育	一年保育
86					1
87			2		3
88		1			2
89		4	3	2	1
90		2	4	3	2
91		4	7	5	1
92		2	2	1	1
93		1	3	2	2
94			2	1	
95			1		
96				1	1
97		1		2	1
N		1.5	24	17	15
M		90.80	90.10	92.05	90.26
S・D		2.1	2.0	2.5	3.3

体重の増減が著しいのに対して、二年保育児は恒常的な線を描いて増加している。

- (2)、身体充実度

ビルケ氏の表 Priditsi によって算出した早見表を用いて判定した。(幼児の教育第五十一巻第九号、珠川善子、鈴木信政両氏の報告書参照)

第三表  
月例体重測定表（昭和29年度）



結果は、その頻数分配表（第四表）によってわかる通り男子は殆んど同程度であるが、女子は二年保育の方がはるかに望ましい状態である。

(3)、体力測定

昨年と同様の方法で四月と十一月の二回測定した。（幼児の教育

第五表 体力測定表 (昭和29年度)

種目	性別	男		女		平均	
		二年保育(17人) (5歳7ヶ月)	一年保育(25人) (5歳6ヶ月)	二年保育(18人) (5歳7ヶ月)	一年保育(22人) (5歳7ヶ月)	二年保育(35人) (5歳5ヶ月)	一年保育(47人) (5歳6ヶ月)
疾走	(男)	6.49	7.28	7.33	7.89	6.92	7.57
	(女)	122.76	113.52	109.27	107.00	115.82	110.26
立(片足)	(男)	2.10	1.66	2.00	1.82	2.07	1.73
	(女)	1.55	1.3	1.54	1.96	1.57	1.61
投(片足)	(男)	7.97	6.76	4.01	4.43	5.93	5.65
	(女)	11.7	32.0	50.0	72.7	31.4	51.0
竹登り	(男)	23.5	16.0	27.8	22.2	25.7	24.7
	(女)	84.7	52.0	46.40	86.40	52.31	78.74
懸垂		58.57	71.99				
教育年限	(男)	16人 (5歳1ヶ月)	24人 (6歳0ヶ月)	16人 (5歳10ヶ月)	17人 (5歳11ヶ月)	32人 (5歳1ヶ月)	41人 (6歳0ヶ月)
	(女)	6.36	6.63	6.80	7.22	6.58	6.87
立(片足)	(男)	123.41	116.10	105.94	112.80	114.93	114.50
	(女)	2.40	2.10	2.22	2.90	2.06	2.20
片足跳	(男)	1.67	1.49	1.48	1.95	2.31	2.02
	(女)	11.01	7.89	4.81	5.65	7.91	6.77
竹登り	(男)	25.0	20.8	25.0	11.8	25.0	17.0
	(女)	75.0	54.2	50.0	23.5	62.5	24.4
懸垂		109.56	83.23	68.91	85.37	89.24	84.30

第六表 小学校第一学年体力測定表 (昭和30年4月調査)

種目	性別	男		女		平均	
		附属幼稚園からいったもの (20人)	家庭その他からいったもの (22人)	附属幼稚園からいったもの (18人)	家庭その他からいったもの (27人)	附属幼稚園からいったもの (38人)	家庭その他からいったもの (49人)
疾走	(男)	12.19	13.38	13.05	14.41	12.61	13.90
	(女)	124.11	121.14	119.65	119.65	121.88	120.37
立(片足)	(男)	3.19	2.12	3.03	2.45	2.69	2.99
	(女)	10.9	10.30	5.6	6.0	8.3	8.2
竹登り	(男)	15.0	19.0	16.9	23.1	13.3	21.1
	(女)	70.0	38.1	42.9	50.0	29.7	44.1
懸垂		129.90	110.13	99.45	118.71	114.68	114.42

結果は第四表の通りである。これによると、(一)、両回とも一年保育児よりも二年保育児の方がよい。(二)、一年保育児も二年保育児も共に四月よりも十一月の方がよくなっているが、一年保育児の方が発達が著しい。(三)、特に走投跳に比し学習によってより発達する片足跳と竹登りにならざるべき。

なお、参考までに小学校就学直後における幼稚園からいった児童と家庭その他からいった児童との比較表を掲げておく。(第六表)これは千葉大学教育学部附属第二小学校の一年生にして調査したの

であるが、この小学校は学区制をしており、或部落の児童全員無条件に入学するので普通の小学校と同様である。付属幼稚園から進学する以外は殆んど大部分家庭から直接入学する。

## 保育環境が歯（乳歯）の石灰化に及ぼす影響について

保育医学研究会

深田 英朗

### 緒言

戦後一〇年乳幼児の体位も漸次向上し、乳児死亡率も著しく低下した事は周知の事実である。

然るに乳幼児の歯牙疾患とくに齲蝕症はひとり年々増加の傾向をたどりつつある事は誠に我々小児歯科学を専攻する者にとってゆう一つの種である。

さて、ムシバ予防法は従来より幾多の研究業績もあり、例えば、鉍銀法、弗化ソーダー法等々色々あるが、いづれも今日その効果は未だ充分に期待出来ない。いわゆる建設医学的立場にたつ保育医学の観点からも本質的なものと思えない。

私共は強い歯質の建設こそ、ムシバ予防の第一段階と信じ、歯質の形成に保育環境が以外なる影響を及ぼすか、本研究に於て調査し

表 3 授乳法と歯の石灰化

授乳法 \ 灰化段階	A	B	C
母乳	9 8.6%	58 55.2%	38 36.2%
人工	1 6%	8 47.0%	8 47.0%
混合	1 2.4%	28 66.6%	13 31.0%

表 1 妊娠中の状態と石灰化

母胎状態 \ 灰化段階	A	B	C
健	11 7.6%	83 57.2%	51 35.1%
否	0	9 47.4%	10 52.6%

表 2 生下時体重と歯の石灰化

生下時体重 \ 灰化段階	A	B	C
3000g 以上	9 9.6%	56 59.6%	29 30.8%
2500g~3000g	1 2.0%	30 58.3%	20 39.2%
2500g 以下	1 5.3%	7 36.8%	11 57.9%

表 4 乳児期の健否と歯の石灰化

乳児期状態 \ 灰化段階	A	B	C
健	10 8.1%	76 61.2%	38 30.7%
否	1 2.5%	16 40.0%	23 57.5%



表、 保育環境と石灰化

灰化段階 保育環境	A	B	C
上	6 12.8%	25 53.2%	16 34.0%
中	3 4.8%	44 69.8%	16 25.4%
下	2 3.7%	23 42.6%	29 53.7%

Melanly. SchourStein. Kronferd. Rushton. 生田等により広く研究されている。併しこれ等の研究は、殆んど実験動物によるものであり、尚幾多の研究余地を残すのである。

研究方法

私は、乳歯の歯質形成と保育環境との間に如何なる関係があるかを追及すべく一六四名の児童より蒐集せる脱落乳歯二七三歯につき病理組織的検査を行いそれらの構造と既成の保育環境とを比較してみた。尚調査の対照に選んだ児童はすべて東京で生れ、水道水のみを飲料としたいわゆる斑状歯発現のおそれの全くないもののみである。歯牙の病理的研究方法等については、問題が余りに専門的になるので省略するが、石灰化程度により調査歯牙をA、B、Cの三段階に判定した。尚調査項目は、

た。

乳歯の形成は主として母胎内及び乳児期にその形成は完了し永久歯の形成は乳児期及び幼児期を通じて行われ、六才までにその歯冠部は全部完成されるのである。それ故歯牙の形成と乳幼児保育と云う事は、密接な不可分の関係があるのである。従来生活環境が、歯牙の石灰化に及ぼす影響については古くは、Magriot Zigmoudy 新しくは

表一 (1) 妊娠中の母胎の健否と児童の歯牙の石灰化の状態

表二 (2) 生下時体重と石灰化状態

表三 (3) 授乳法が歯牙石灰化に及ぼす影響

表四 (4) 乳児期の健否と歯の石灰化

表五 (5) 母胎内より乳児期を終るまでの期間を通しての保育環境を

上、中、下の三段階に分類し、歯の石灰化の程度との関係を追及した。この場合環境上は生下時体重三〇〇g以上で母胎内乳幼児期を通じて何ら異状なくしかも母乳で哺育されたものは母胎内乳児期を通じての環境に於てどこかに相当の異状を認めたもの、又は生下時体重二五〇g以下のものは、上、下、下いずれにもあてはまらぬものと一応規定した。

研究成績

実験成績は表一〜表五に示す如くである。しかし、この研究では症例数が少なかつたこと及び既成の調査が質問法によつたため、解答者の主観によつて多少の開きなども恐らく出たため、未だ充分な成績ではないと思う。又歯牙の石灰化を左右するものが必ず保育環境のみでなく、これに加えるに遺伝と云う事があるため思った程の相関が得られなかつたのであろう。しかし本成績からして保育環境が有利であると云う事は歯牙の石灰化にもよい影響を及ぼしていると云う事は明らかだと信じる。

# 新入園児のスキップ調査

静岡県立保育専門学院

小木曾光子

(一) 目的 リズム遊びにおいてスキップの出来る出来ないという事は子供達に取って保育園や幼稚園の生活を楽しむ上に大きな影響があることを常に見る所である。故に私達は自由遊びの場に於いてそれとなくスキップの出来ない子供を見つけ出して適当な方法で一日も早くスキップが出来るように指導しなくてはならない。それには先ずスキップでの発達段階を明らかにしてその指導法を確立させなくてはならないのでスキップで調査をすることにした。

(二) 方法 ABCの三つの場を作り七つの項目について個別的に調査をした。(A)の場とは子供にスキップをしましょうと云わず子供の手を取ってスキップをする。(B)の場はスキップをしましょう先生の足をよくみてまねしてねと指示する。(C)の場とは音楽に合わせてスキップをしましょうと云って行う場である。七つの項目とは先の三つの場に於いて子供が現わす状態を分けたものである。(1)両足を一緒に上げてぶら下がる(2)すり足でついでくる(3)片足跳びでついでくる(チンチン) a(4)片足跳びの足を左右回数をかえてついでくる(左右b) (4)片足跳びの足を左右交互に取り変えるからテンポが遅いスキップで(5)小走りでついでくる(6)歩いてくる(7)以

	男	女	計
一年保育	220	224	444
二年 "	137	123	260
三年 "	25	36	61
四年 "	1	2	2
合計	3813	385	726

上の六つの型の混合されたもので(1) a (すり足ケンケン) (2) b (ケンケン 121) (3) c (小走りケンケン) (4) d (小走りケンケン) 足取りかえる(5) e (歩きケンケン)等。

(三) 対象 新入園児

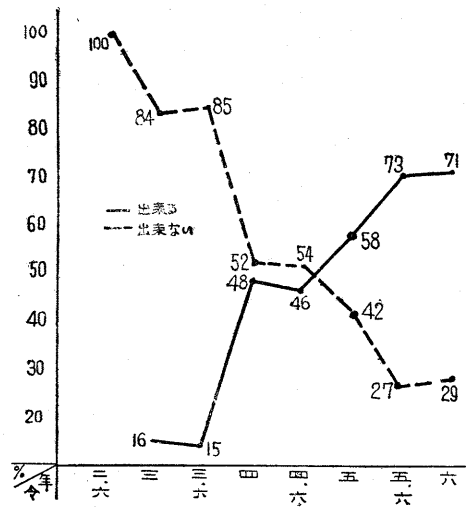
(四) 調査期間 昭和三十年自四月八日から二十日迄

施設	スキップ	スキップ	
		出来る	出来ない
幼稚園	1	72%	28%
	2	68 "	32 "
	3	70 "	30 "
保育園	4	54%	46%
	5	49 "	51 "
	6	47 "	53 "
	7	46 "	54 "
	8	44 "	56 "
	9	40 "	60 "
	10	39 "	61 "
平均	54.4%	45.6%	

である。第二表はそれ等の子供を年令別に表わしたものであってこれによって新入園児の半分はスキップが出来なく又四才の終り頃が出来るか否かの交叉点となっている事が解った。新入園児の半分以上も出来ない子供のいる三つの園で更にBCの場について調査を進める事にした。第三表はそれ等の子供の年令別を現は五・六が多くBには二・三が多く見られる。これによって私達はAわしたものである。

(五) 結果について

第一表幼稚園三ヶ所保育園七ヶ所についてAの場に於いてスキップが出来るか否かについて調査した結果を%で現わしたものである。



に田中B式と三才児には山下先生のを用いた。此の他に体力測定してみたら片足跳の左右の差が四分の一以上で有るとスキップが出来ないが例えIQが劣であっても其の差が僅かであれば出来る子供も居たABC三つの場で調査続けた百三十一人が各々の場で現わした型を集計して順位に並べたのが第五表である一見して解る事は5・6が一番多く次に2・3が見られ次は4bで後は大体同じ位である。然し三才、四才で4bを現わしている子供はIQの高い子供で四才六才以上の子供を見ると割合混合型が多く又四aも見られる。以上の事から考えてみると発達段階は六五二三四a四bのように考えられるが個人々々のスキップが出来る迄の路を数多く観察して見ないと確実な所の結論は出ないと思うが何か見通しがついた様な気がす

又IQとスキップの関係を見る為調査したのが第四表であるが日数の少い為知能検査は二つの園児百十六人しか出来なかつた。検査は四才以上

第三表

ABCの場で調査した年齢別表

性別計 年齢	性別		計	合計
	男	女		
6	可	1	2	3
	否	2	2	4
5.6	可	7	5	12
	否	16	6	22
5	可	7	3	10
	否	19	13	32
4.6	可	5	1	6
	否	15	4	19
4	可	6	0	6
	否	13	9	22
3.6	可	3	1	4
	否	10	7	17
3	可	0	1	1
	否	8	7	15
合計	可	29	13	42
	否	83	48	131

(六) 結果の考察 此の三つの表を眺めてみると自から指導法が浮び上って来る様な気がする。先ずAとBとを比べて見るとAにスキップの出来ない子供にBでスキップをしましょう先生の足を見てまねをしましょうと云う動機づけを与える事が大切だと思ふ。然しCの場で音楽に合わせてとか良く聞いてと云うとBで四bや混合型であった子供等が五や二に変化して逆もどりするような乱れがCに多く見られるから私はBで四bや混合型の子供等には音楽に合わせてとかよく聞いて等と余り強く云わない方がよいと思ふ。それは運動神経と聴覚とを同時に働かせると云う事から来る現象であるのではないかと考えられるし又一方音楽に対して感受性が強い子供だと云う事も出来よう。

(七) 結び そこで私は片足跳とスキップの関係を基として一つの指導法を考えてみた。それ等の子供達に自由遊びやリズム遊びの

第五表  
Aの場に現われた型の順位

順位		1		2		3		4		5	
年齢	性別										
6	男	2.	5.	50%							
	女	5.	6.	50%							
5.6	男	4a		37%	2	25%	5	18%	3.	7イハニホ	6%
	女	3		33%	2.4b	5	7ハ	16%			
5	男	5		26%	2	21%	3	15%	4b	10%	4a
	女	2		30%	3.	5.	7	15%			5%
4.6	男	5		33%	2.	3.	20%	6	13%	4ab	6%
	女	5		50%	2.	3.	6.	25%	7	15%	
4	男	5.	6	39%	4a		22%	4a	15%	3	70%
	女	5		22%	3	6	11%				
3.6	男	5		50%	2	20%	4a	6	10%		
	女	5		42%	3	28%	2	7イ	14%	4b	6
3	男	6		51%	5.	25%	3.	4a	14%		
	女	5.	6	42%	2	28%	4b	14%			

\* イ=2+3の形    ロ=3+4の形    ハ=3+5の形    ニ=5+4の形    ホ=6+3の形

Bの場に現われた型の順位

順位		1		2		3		4		5	
年齢	性別										
6	男	2.	4b	50%							
	女	5.	6	50%							
5.6	男	5		31%	2	25%	3.	6	12%	4a	6%
	女	2.	3.	5.	4b		7.	ロハ	16%		
5	男	5		26%	2	21%	3.	6.	7ハ	10%	4a
	女	2.	3.	5	4b	15%	7.	ロハ	7%		
4.6	男	2.	5.	6.	3.	13%	1.	7ハ	6%		
	女	5		50%	2.	3.	6.	25%	4b	6%	
4	男	6		39%	5	30%	2.	3	15%		
	女	5		22%	3.	6	11%				
3.6	男	5		30%	2.	4b	20%				
	女	5		42%	3.	28%	2.	6.	7イ	14%	
3	男	6.		50%	5	37%	4b	14%			
	女	2.5		14%	2.	28%	4b	14%			

Cの場に現われた型の順位

順位		1		2		3		4		5	
年齢	性別										
6	男	2.5		50%							
	女	5.6		50%							
5.6	男	5.		37%	2.	3.6	18%	7ハ	60%		
	女	2.		66%	3	4b5	33%	7ロハニ	16%		
5	男	5.		31%	2.	6	15%	3	10%	7・ハ	50%
	女	2.		30%	3	4b5	15%	7ハロニ	7%		
4.6	男	6.		26%	5	20%	3	7ハ	13%	2.	6%
	女	3.	5.6.	7.	ハイ	25%					
4	男	6		39%	5	30%	2.	3	11%		
	女	4a5		22%	3	6	11%				
3.6	男	5		30%	2.	4b	20%	3.	7イ	14%	
	女	5		42%	6.	20%	3.	7イ	14%		
3	男	6.		50%	5.	37%	4b	14%			
	女	2.5		14%	2.	28%	4b	14%			

第四表 IQとスキップの関係

年令	性	優		中の上		中		中の下		劣	
		男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
6						1	1				1
5.6		1		2	2	3	9	1	6		1
5				1	1	2	5	3	6	1	
4.6			1	2		1			1		
4											
4											
3.6											
3											
2.6		1	2	5	4	7	17	4	13	1	2
計											

合計 116人

年令	性	優		中の上		中		中の下		劣	
		男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
6								2		1	
5.6						4	2	1		1	
5				1	1	4	4	2	3		1
4.6			1	4	1	1	1	1			
4				1	1	4	1	1			
4				3	1	1	1	1			
3.6				1		1	2	1	1		
3											
2.6					1			1			
計		0	2	10	5	17	11	8	4	2	1

中で石けりなわとび、片足跳びの鬼ごっこなどをなるべくさせて左右の片足跳びの開きを少くする様に指導したら良いのではないかと考えている。

(八) 残された今後の問題 IQとスキップの関係を知る為に精神薄弱児施設でも同様調査を行ったが正常児には見られない様な又名前のつけようもない様な型が見られた。聾盲啞児達にも同様の調査を行って見たいと思っている。あらゆる方面からスキップと云うも

のを眺めてみたならばスキップの発達段階が自然と現われてくるのではないかと思いますので今後とも此の様な研究を続けて行きたいと思つてゐる。又指導法についても其の実際をしたと思つてゐる。

## 幼児の質問と保育課程の構成

埼玉大学

野間 郁夫

### 一、質問調査の目的および方法

幼児の質問を知ること、彼らの興味、関心の対象、方向を探る一つの大きな手掛りを与えるものである。よつて幼児の質問を調査し、以て保育課程の構成に資せしめようとするのが本調査の目的である。

本調査は埼玉大学附属幼稚園児四三名および三一名計七四名について、それぞれ二ヶ年づつ継続して行つた。幼稚のIQ平均は二二〇・九(新乙式団体知能検査)である。父兄の職業は会社員、公務員、教員等所謂サラリーマンが七四%、医師、画家などの自由業一六%、商業が一〇%であり、概ね市街住宅地に居住している。

調査の方法は家庭における幼児の自発的な質問を父兄が随時渡してある手帳に記入するという方法で、趣旨および方法については事前に指導した。結果として、熱心に書いた父兄と然らざるものがあり、記入漏れの質問も多数あると思つたが、総数を増すことによつてその欠陥は補いうると考え、ここでは総数を問題とした。調査は

資料5 人体(自然)

生理	41 (31.3) %	新代 陳謝	知覚	神経	呼吸	筋運動	消化吸収	循環
		13	7	6	5	5	4	1
形態	39 (29.8)	(組織)		(器管)		資料6 保健,衛生(自然)		
		(15)		(24)				
成長	24 (18.3)	成長		死				
死		5		19				
生殖	17 (13.0)	生殖		性				
性		15		2				
進化	8 (6.1)	進化		起源				
起源		2		6				
その他	2 (1.5)							
計	131					計		69

資料8 自然に関する質問

項目	質問数	同%
天象	105	9.2
地象	79	7.0
気象	149	13.1
物理現象	88	7.7
機械・器具	140	12.3
化学現象	37	3.3
植物	84	7.4
動物	255	22.4
人体	131	11.5
保健・衛生	1137	6.1
計	1137	100

資料7 社会生活に関する質問

項目	質問数	同%
皇室	5	2.2
政治	42	18.9
交通	29	13.1
通信	18	8.1
災害	14	6.3
職業	8	3.6
経済	4	1.8
地理	31	14.0
歴史	5	12.2
年中行事	44	19.8
道徳・習慣	11	5.0
その他	11	5.0
計	222	100

資料1 幼児の質問の分類

領域	質問数	同%
自然	1137	59.09%
言語	236	12.27%
家庭	228	11.85%
社会	222	11.54%
非実在物	52	2.70%
数量・時間	24	1.25%
その他	25	1.30%
計	1924	100

資料2 非実在物に関する質問

項目	質問数	同%
神仏・靈魂	13	25.0
物語・伝説	36	69.2
化物・幽霊	3	5.8
計	52	100

資料3 家庭生活に関する質問

項目	質問数	同%
食品	89	39.0
被服	38	16.7
住居、水道、 庭用器、 器具用品	35	15.3
日用品	48	21.1
婚姻、 親族関係	16	7.0
その他	2	0.9
計	228	100

資料4 数量に関する質問

項目	質問数	同%
数量	9	37.5
時間・時刻	15	62.5
計	24	100

三ヶ年継続して実施されたから季節、年度等による質問の偶然性は比較的避けられていると思う。総数はこれによって断定的結論を下すに十分とは考えないからここには研究の方向と質問の大体の傾向の一端を示し、なお今後の研究に俟ちたいと思う。

## 二、調査結果の考察と保育課程構成上の問題

質問の分類に当っては保育課程の構成に役立たしめる観点から質問の対象たる事物と、幼児の質問する動機、態度に重点をおいた。全体の質問の傾向(資料1)は自然に関する質問(内容は資料8)が最も多く五九%を示す。これと対蹠的な非実在物(資料2)に関する質問が少いことはデヴィスなどの研究と一致している。

言語に関する質問は単純なことばの意味をたずねるもので、これには記入もれのものも多いと考えられるから全体における位置はもっと高く、これは幼稚園教育における言語指導の問題と関連してくる。

家庭生活(資料3)に関する質問中、ミシン、ラジオ、電燈等は自然の機械、器具の項に分類してある。家庭における人間関係に関する質問は婚姻に関するもの位で全体からいえば少く、むしろ家庭にあるものについての質問が殆どである。その中でも食品の質問が多く三九%を示すが、注意すべきことはその中の約三割は菓子、飲料の如き嗜好品に関する質問である。これは保健、衛生に関する質問(資料6)で栄養に関する質問が少いことと関連して保健指導上考慮すべき問題を提示する。

社会生活(資料7)に関しては、正月、節句、盆、七夕等や記念日、週間などの所謂年中行事に関する質問が政治に関する質問ともにも多く、次いで地理および交通となっている。政治の中、戦争、放射能、原爆、黄変米などのなまなましい時事問題に関するものがその六割以上を示していることは、幼児と雖もマスコミコミュニケーションの発達した現代にあつては、国の政治、世界の動きがちかに身に迫って感ぜられることを物語るものであり、幼児の保育と雖も

資料12 物理現象 (自然)

類別	質問数
光	32
音	21
物性	14
熱	13
力・運動	5
磁気	3
計	88

資料11 地象 (自然)

類別	質問数
海	20
地球	13
水	9
川・湖	9
山	8
石・砂・土	8
地震	8
温泉	4
計	79

資料10 気象 (自然)

類別	質問数
雨	41
季節	19
雲	19
雷	19
颱風	13
氷、氷柱	10
風	8
雪	7
霜	4
霧	3
電・霜	3
空気が	3
計	149

資料9 天象 (自然)

類別	質問数
月	49
星	15
空	15
太陽	12
昼夜	8
四季	4
方位	2
計	110

かかる世の動きから離れた花園の中で行うわけにはいなくなっていると考えなければならない。保育課程において如何にこれに配慮する用意があるかが問題である。

自然に関する質問の分類においては小学校の教育課程等との関連を考え、機械・器具、人体、保健・衛生の項を設けた。保健・衛生を人体に含まして考えたと質問の多いものは、動物、人体、気象、機械・器具であり、植物、地象(地形、地質、岩石、鉱物を含む)化学現象は少い。これらから幼児は人間あるいは人間に似たもの、動くもの、変化のはげしいものに、より多くの興味をもつと考えられるが、天象中、月に関する質問の多いことも同じ理由からであろう。ことに月の質問は一事物に関する質問としては全質問中最も多く、自然の事象を通じて月のもつ価値、重さなどがこれから考えられよう。一般の保育課程において七夕で星のことをやり、お月見で月のことをやるといった行事的排列や、天体物理学による論理的順序や、星も太陽も月も同じ重さと取扱をするといったことについては一考を要するのではないだろうか。

動物(資料13)においては昆虫に関する質問が最も多く、これに次ぐ哺乳類のものとを合わせると動物の五二%を占めている。

幼稚園において哺乳類の飼育、観察と同様に虫の観察指導が必要である。しかも動物に関しては生態、習性に関する質問が圧倒的に多い(五〇%)これを植物(資料14)に比較すると植物においてはむしろ分類、形態に関する方が多い。動物で分類、形態に関する質問は動物園にいる象、ライオン、キリンなどの珍しい動物に関して



資料 13 動物 (自然)

類別	質問数	生態 習性	分類 形態	生殖(性) 発生・成長	生理	その他	内 容
昆虫類	68 (26.7)	46	5	16	1		セミ, トンボ, 蚊, 蝶 蟻, 蠅, 蜂, 芋虫, 毛 虫等
哺乳類	65 (25.5)	24	24	2	9	6	犬猫, 牛馬, 兎, 羊, 山羊, モグラ等。象, ライオン, 虎, 猿, キ リン等。鯨
鳥類	46 (18.0)	21	8	15	2		鳥, 鶏と卵, 燕, 雀, 鳩等, カナリヤ, 目白, 鶯, フクロウ等
魚類	32(12.5)	14	3	3	11	1	魚, 金魚,
両棲類	17 (6.7)	6	2	8	1		蛙, オ玉杓子
爬虫類	8 (3.1)	5	3				蛇, 龜
軟体動物	7 (2.7)	4	1	1		1	蝸牛, タコ, イカ, 貝, ナメクジ
甲殻類	5 (2.0)	2	2		1		カニ
蜘蛛類	4 (1.6)	4					蜘蛛
円形動物	1 (0.4)	1					ミミズ
動物一般	2 (0.8)	1	1				
計	255	128	49	45	25	8	
(%)	(100)	(50.2)	(19.2)	(17.7)	(9.8)	(3.1)	

資料 14. 植物 (自然)

類別	問数質
分類・形態	36(42.8)
生殖・発生・成長	27(32.1)
生理	13(15.5)
生態	5(6.0)
遺伝・進化	3(3.6)
計	84(100.)

発せられている。また動物に関してはすべてその名称が出て来るのに対し、植物についてはその名称が挙げられているのは三六%しかない。すなわち動物については幼児は形態的判断を一応下していると見られよう。

以上のことから動物に関してはその生態、習性を十分に知るために飼育等による継続観察が必要であり、植物についての質問が極めて少いことからして都市幼稚園においては諸種の植物を栽培し、種子からの成長の過程を観察させたり野外観察の機会をしばしば持つことが絶対に必要であることを改めて強調しなければならない。

機械・器具に関するものは自然に関す

る質問中でも多いものに属するがその中でも汽車、電車、自動車、船などの乗り物に関するものが三〇%を占めている。保育課程中のりのものごっこが多く採り入れられているのは正しいわけであるがこれが社会的立場において取扱われることの多いのに対して、幼児はこれに科学的な探求の芽生をもつて向っているものであり、ここにも食い違いが見られる。のりものについてはもつと統合的取扱が必要ではないであろうか。総じて幼児は現代においては近代文明の所産たる機械・器具に取囲まれて生活し、これに対して自然科学的興味を芽生を抱いているに拘らず従来その芽生を伸ばす配慮が乏しかったのではないであろうか。自然全体に対する幼児の質問が全質問の五九%という高いものであるに拘らず幼稚園における幼児の活動においてこの幼児の自然への興味、関心が十分に満たされていたであろうか。例えば物理現象に関するもので光の屈折、反射についての質問が多いが鏡やその他のものを使って光について学習するための遊びなどもっと工夫されてよいのではないかなどと考えさせられる。

保育課程全体において自然に関する活動は如何に位置づけられるべきであるか、如何なる内容をもつべきであるかなどの問題が改めて考慮せらるべきではないかと思ふものである。

### 三、むすび

従来教師が漠然と描いてきた幼児の姿と現代に生きることももの実態とは食い違がないだろうか、更に現代においてどのような理想的な子どもの姿を描いて保育すべきであるかということを変更して考え直す態度をもつことが保育課程改造の第一歩であると信ずる。

資料 15 機械・器具  
(自然)

類 別	質問数
汽 車 電 車 船 自 動 車	42
ラ ジ オ	24
電 燈 電 気	21
時 計	14
飛 行 機	10
玩 具	10
ミ シ ン	8
映画・テレビ	7
そ の 他	4
計	140

本研究はそれへの一資料たるに過ぎないが従来の研究とともに共通の欠陥としては対象が都市の幼児に限られていることである。幼稚園の都市偏在からして止むを得ないが更に農山漁村において研究がなされたら日本の幼児教育に資することが大であると思う。なお埼玉大附属幼稚園においても継続研究を進められるから今回の不十分な点は今後の研究にまらちたいと思う。

## 精神薄弱児の言語に 関する考察

名古屋市立保育短期大学

甲 斐 久 生

加賀美 あぐり

棚 橋 節 子

広 松 田 鶴 子

〔要旨〕：幼児の言語や幼児と精神薄弱児の言語の比較に関する研



この研究により精神薄弱児は如何なる程度に自己中心的に思考し行動するか、又彼等相互の知的交流ほどの程度のものか類推出来た。

③命令系統言語 即ち命令、要求、威嚇、拒否、求同意の五つの機能について分布を調べた所、総て同様な傾向が見られた。この分布曲線の特徴は、I・Q〇〇～四〇迄はわずかではあるが上昇、四〇～六〇の間に一つの極大値をもち六〇以上になると序々に下降する。私達の解釈

i、Aグループは社会的言語が少いから命令系統語の全体語数に對する比率は小さい。

ii、Bグループになると社会的言語を發する度合がやや増すが、命令系統語の割合がCより甚だ大である。これは社会的言語の中でも命令系統は社会性の低度を現すものであると考えられる。

iii、命令系統語は、周囲の事情に關係なく發する言語が多く、積極的社会性に欠ける事により、自己中心性が大である。

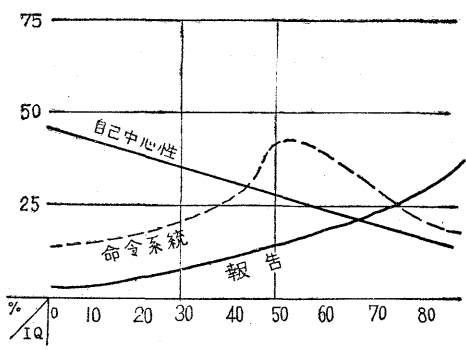
〔結論〕

《A、私達の得た結論》

- ①グラフにプロットすれば、大体一定傾向の曲線を描く事が出来る。
- ②それによれば命令系統語は五種の機能語総て特異な類似曲線を描いた。
- ③I・Qの低い者は非社会的言語の比率が大きく、自己中心性が強い。I・Qの増加につれ非社会的言語の比率が減少する。命令系統

の比較的多い者は、大体I・Q四〇～六〇迄の者と推定出来、社会的言語中でも命令系統の言語は或程度の社会的低さを示すものとなる。I・Q二〇以上になると命令系統の言葉が小になり、報告、質問等が多くなる。

I・Q 曲線



B、今後この研究を進めるために

- ①資料蒐集は統計的に正確さを欠いたと思ふ。もっと長期に渡り、各人色々の環境の下で多くの言葉を取るべきである。
- ②年令、生育史によっても分類しもっと精度の高い曲線を得るべきである。
- ③命令文の百分率、文章の主体客体により自

- 己中心性を比較すれば良い結果が出ると思ふ。
- ④言語内容を質的に考察分類すると良かった。
- ⑤名詞、代名詞の形成について考察しても面白い結果が出たと思ふ。

参考文献 アビジエの臨床心理学

# 保育園児の社会的成熟度

について

名古屋市保育短期大学

甲斐久生  
宇井淑子

## 一、研究目的

幼児の社会的成熟は、幾多の経験を重ねる事に依って幼児の心性の特徴である自己中心性が解消せられ、活発に展開する萌芽の時期にある。体験する経験は幼児夫々に依って異なる様に社会的な成熟に於いても個々の幼児によって異なる。この個々に於ける発達の様相をとらえ適切な指導をするには、標準的な一定の基準が必要であり、この基準にしたがって発達段階を知る事が出来ると思う。その発達が社会的成熟である事から幼児の生活場面である地域社会を無視する事は出来ない。従ってその地域に於ける発達基準が必要とせられる訳で、知能テストの如く一般化せられていないところから、名古屋市に於ける幼児の社会的成熟尺度の作製を試みた。

## 二、研究方法

研究対象としては、名古屋市に於ける保育園児二九〇名をとった。表一がそれである。名古屋市を住宅地域、商業地域、工業地域の三つに層別し、一地域に於いて三又は四保育園を選び、その一つ

表 1

	住	商	工	計
4才	25	20	22	67
5才	35	35	35	105
6才	42	40	36	118
計	102	95	93	290

の保育園から平均五〇名をとった。

尺度の作製には、牛島義友先生の社会的生活能力検査、ドルの *Social maturity scale* 等を参考とした。選出した問題は、四〇項目ありこれをドルの尺度と同じ様にSHD、SHE、SHG、SD、C、S、O、Lの八つに分類した。この作製した尺度を持つて、質問紙を作り幼児の行動評価を各家庭に於いてしてもらった。出来るものには○印をつけ出来ないものには×印をつける事とした。

調査の期間は昭和二九年二月二〇日から昭和三〇年一月二六日までである。

## 三、研究結果

四〇項目について合格率を検討し、尺度として不適當と思われる問題を除外し別表の如き二五項目をもって社会的成熟尺度とした。この尺度に依って出来る問題には一点を与え、出来ない問題を無点として個人の得点を出し、年令別、性別、地域別に相違を見てみた。表二、表三はそれである。

年令的な発達をクラブに書くと同様の様である。

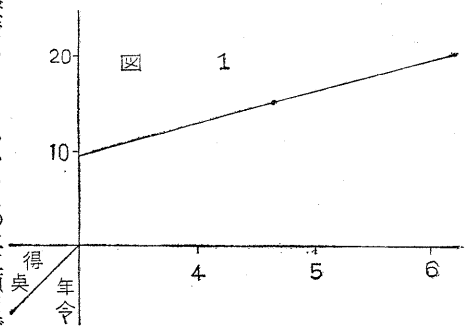
年令的発達是一直線で表わされている。この場合の年令は平均年令あり、四才は四才八ヶ月、五才は五才七ヶ月、六才は六才四ヶ月となっている。以上尺度の作製をし色々な結果を得たが、これ等をまとめて見ると次の様である。

表 2 (平均値)

地域	4 才			5 才			6 才			全 体		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
住宅	15.4	15.7	15.5	18.7	19.4	19.1	19.9	22.2	21.0	19.9	22.5	19.0
商業	15.8	14.0	14.7	18.1	18.7	18.4	18.7	21.0	20.1	17.2	18.7	18.3
工業	15.1	14.7	14.8	16.5	17.7	17.0	19.6	21.3	20.4	16.8	17.6	17.3
計	15.2	14.8	15.0	17.6	17.7	18.2	19.2	22.0	20.5	17.7	19.1	18.4

表 3 (標準偏差値)

地域	4 才			5 才			6 才			全 体		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
住宅	4.4	2.7	3.8	3.1	3.7	3.4	3.8	2.5	3.5	4.3	1.9	4.1
商業	3.9	2.5	3.5	3.1	3.2	3.2	2.0	2.5	2.6	3.3	3.7	3.6
工業	1.8	3.6	3.3	3.7	3.3	3.6	4.1	2.8	3.6	3.6	4.0	4.2
計	3.7	3.2	3.6	3.5	3.6	3.5	3.6	2.1	3.3	3.9	4.0	4.0



際であるところからこの二五項目でもって社会的成熟尺度とする事が出来ると思う。

対象児はほんの少しではあるが、一応標準的な基準として考えてもよいのではないかと思う。今後はこの尺度と幼児の家庭環境とについて知らべて見たいと思っている。

参 考 文 献

- 一、牛島義友 社会的生活能力検査・二、児童研究会 児童と社会生活
- 三、守屋光雄 幼稚園児・四、児童と精神衛生の中心 幼児の社会的成熟に関する研究

社会的成熟尺度

一、箸でこまかい豆をつかむ。

- 一、社会的態度の交流(C)の発達は年令的な発達  
の差が大きい。
- 二、女子は爪を切る、魚を  
むしる、紐を結ぶ等手  
先きの細い仕事に対す  
る成熟が早い。
- 三、男子は保育園へ独りで  
行くでみられる独立的  
行動に於ける成熟が女  
子より早い。
- 四、年令的な発達段階が明

## 幼児の自由画と生活感情

—幼稚園における所見に基いて—

西南学院短期大学児童教育科

高橋 さや か

- 二、鉛筆やクレヨンで描画する。
- 三、魚などむしって食べる。
- 四、欲しいものがあっても後でと言うことがわかる。
- 五、保育園へ一人でいける。
- 六、順番をおとなしく待つことが出来る。
- 七、お金を持って使いに行ける。
- 八、手伝ってもらわずに床につく。
- 九、毎朝顔を洗う。
- 一〇、スキップができる。
- 一一、鋏で形を切り抜くことができる。
- 一二、こぼしたり、ひっくりかえしたりしないで食べる。
- 一三、自分の経験を話す。
- 一四、ことづけをまちがいなく伝える事が出来る。
- 一五、双六やカルタができる。
- 一六、人の前で歌ったりおどったりする。
- 一七、歯をみがく。
- 一八、ひとりで風呂にはいる。
- 一九、保育園へ行く時自分の持物をひとりで用意する。
- 二〇、ひとりで衣服がきれい。
- 二一、厚紙がきれい。
- 二二、小さなけがなら自分でくすりをつける。
- 二三、紐をかた結びにする事が出来る。
- 二四、自分の名前を正しくかなで書く。
- 二五、片手なら自分で爪をきる。

### 《序言》

幼児の自由画、生活感情と密接な関係をもつことは既に多くの例があげられ、改めて言うまでもないことのように思われる。しかし現在の状態では、少くとも、施設における保育生活の中で描かれた「自由画」がどの程度に真に幼児自身の生活感情を表現しているものであるが、俄かにはきめ難いといわねばならないのではないかと思う。施設の保育担当者が、子どもを十分に尊重し、自発活動を熱心に誘導しているにしても、子どもの造型活動は常に純粹に自己の全部に忠実であるとは限らない。

ここに試みた考察は、一九五四年度の西南短大児童教育科附属舞鶴幼稚園の園児のうちから、五―六才（最年長組）児七〇名、四―五歳児四〇名について、一年間の観察をまとめたものである。考察の対象にしたものは描画時の観察ノートと、子どもの作品とであるが、作品は、所謂「しごとの時間」―規程保育のプログラムの中の時間にかかせたものと、自由遊びの時間中に子どもが望んで自分か

らかいたものであって（後者は全部であるが）作画への指示が一切なかった折のものだけに限った。（作品数約二千点、一名当り一二〇点）

## 1、方法

作品を、①題材、②色彩、③形態、④筆勢、⑤塗り方、⑥輪郭線の六つの観点に従って類別し、知能・性格傾向・健康、及びそれらを総合したつ環境の諸条件に影響されるところの生活感情との関連を求めた。

## 2、概観

### ① 題材

「のりもの」「人物」をテーマとしたものが最も多く、各々四〇%（約八〇〇枚）を占めている。他は、動物家、食物及び食事、山、道、火事、行事（祭、誕生祝い、遠足など）が目立つ方である。花はよくかいてはいるが主としてつけたし（点景）であって、テーマとすることはごく少い。

子どもの側から見ると、題材がいつも大体きままっているものは、一一〇名中八〇名にも及ぶ。但し、かき方なり形態は一年間で変化もし発達もしているから、厳密にモチーフが同じであるとはいえないとも考えられる。抑圧感情と関連が深いとされている題材では、火事がかかりあった（一・五%）が、お化けやユレイ、蛇、おしっこ、などは例外的で各々三枚から八枚をかぞえるにすぎない。（平均〇・三%）概して子どもが題材にえらぶものは、日常生活でたのしいもの、あこがれているもの、親しいもの、うれしかった経験などで、多くは意識的に愉快であったことから再経験しようとして

いる。潜在的なものの昇華をはかることは、題材の上からは少いといえる。

### ② 色彩

「一色が主体的につかわれている」(二〇%)

「二、三色が主体になっている」(三〇%)

「ありったけの色が全部少しづつつかわれている」(五%)

「大体写実的・常識的な数色」(三〇%)

「原色の配合の顕著なもの」(二%)

「明るい色が主体になるもの」(四〇%)

「暗い色が主体になるもの」(三〇%)

「うすい色でしあげているもの」(二五%)

「こい色にしあげているもの」(四五%)

これは作品の方の分類であるが、子どもの傾向として同じことを見ると必ずしもパーセンテージは一致しない。つまり、子どもとして、大体明るい色を好む傾向と見られるものでも、時には暗い色を主体とする画をかいているからである。子どもの方で、いつも同じ傾向をみせるものは四〇%、ややその傾向か、という程度のもので二五%、あとは時と場合で、好みの傾向が一致しないものである。

### ③ 形態

「写実的にはっきりしている」(二〇%)

「印象的に適切、適確である」(二〇%)

「独特でやや異様である」(八%)

「形をあらわす線や面が完結している」(五〇―六〇%)

「形をあらわす線や面が完結していない、またはぼんやりしている」



る」(三〇%)

で、これは大体その傾向をもつ子どもの数に作品数をかけたものが、その傾向の看取できる作品数と一致している。

④ 筆勢

「勢のつよいもの」(四〇%)

「普通」(四〇%)

「弱いもの」(二〇—三〇%)

「終りをきちんとはめているもの」(一〇%)

「かき放しにしてあるもの」(一五%)

で、あとの二つは特に目立つもののみを数えた。これもと形態の場合と同じく、子どもの傾向と画の数量との計算はあうようである。つまり、大体、一人の子について一つの固定したタイプが考えられるとしてよいわけである。

⑤ 塗り方

「濃くおしつけてぬる」(二〇%)

「中等度に均一的にぬる」(二〇%)

「考えて強弱をつけている」(三五%)

「むらぬり」(二〇%)

「弱くぬる」(二〇%)

などが目につく。画の上からは特にそういうほどでもないものも多い。一人の子どものぬり方は、筆勢の場合ほど常に同じではない。同じ子どもでちがったぬり方をするものと、常に同じぬり方をするものとは、後者の方がはるかに少いようである。

⑥ 輪郭線

「黒で必ずはっきりとるもの」(一五%)

「それぞれの色でとるもの」(七%)

「特別なものだけとるもの」(五%)

「かこみ枠をつけるもの」(一%)

これも、大体輪郭をとる子はいつもとっているようである。

3、考察

子どもたちの大半はほぼ一定の傾向をもち、どの子のかいた絵か見当がつくようになるものであるが、その半面、必ずしもデータの上から一人の子どもが同じケースにあがってこないものもある。形の完結のしかたと、筆勢と、輪郭線と、この三つのあり方には、子どもによる固定的なタイプがあげられるようにうけとれるが題材、と色彩のあり方は、それほど、はっきりしたものがない。

クレオンとポスターカラーとは、明らかにポスターカラーの方が「自由」であり、クレオンでは殆ど描かない子が、ポスターカラーでは筆をふるっている。ポスターカラーでは人物を一人大きくかく頻度が高まっているのも目立つことの一つであった。

知能との関連性が強いものを取りあげると輪郭線と、写実的な色彩をつかうことは1、2一二〇(田中B式)以上のものに多い。

形が完結しないもの、筆勢が弱いもの、むらぬり、同じものを同じようにかくものは、稍知能が劣るものに多い。興味深く感じられるのは、ありったけの色をつかうもので、I・Q 一一〇一人、一二〇以上四名であり、中の一人は一四〇を示しているのであるが、揃って落着きがなく気まぐれな傾向をもっており、永く親しむ友達たちをもたないものである。不安定ではあるが知能は高い方で一風変

った個性がみうけられる。

性格傾向との関連はぬり方に最もよく表れるようである。濃く強くぬる子は自我が強く、家庭環境でわがままであるか抑えつけられているかしており、中等度に均一にぬる子、考えて強弱をつける子は温和な平衡のとれた性格傾向をもつ。筆勢の点でかき放すものは明るいがき大將型で知能はあまり高くないが、しばしばリーダー格に推される子である。

一色または二、三色を好んでつかうものは一般に外向的であるが、紫や茶色の好きなものには内向性の子も交っており、暗い濃い色を多く使うものは、内向性である上に強い性格である。しかし、考えられているほど色彩と性格傾向とは相関しないともいえるようである。明るい子でも、紫や茶色をかなりしばしば使っている。

最もはつきりうけとれたものに健康との関連であって、色彩、筆勢、及び形の完結度ははつきり健康状態とつらなっている。紫、黒、茶が注意をひくほど用いられた画は、殆ど一〇〇%胃腸の悪い子の、または胃腸障害を起した時の画であった。発熱や呼吸器系の障害の場合は筆勢が著しく弱まっているし、形の完結度も低い。

これらの事情を総合するに、幼児の自由画は、題材の点から見て主として意識的活動であると同時に、好めるもの、たのしき経験、又は希望を描くのが第一義的なものであって必ずしも、潜在的欲求の昇華ではないということである。周囲の社会的環境や人的環境の影響、絵本の影響などもかなりはつきりと形にあらわれる。色彩なども、案外に常識的なものの方が多い。

知能や健康のような基礎的条件はやや作品にあらわるが、それと

でも決定的なものとは言いがたいと思われる。いったい、特殊な例外のほかは、画をかくほどの時、子どもは抑圧の解放などというよりははるかに意識的な構成的な表現活動をしているのである。従って、生活感情もどちらかといえば、明るい面、積極的な面しかあらわれないことが多い。暗い面を出すようなときは、先づかかないのがふつうである。自由画に子どもの生活のかくれた面がひそむのを見出すことができる場合は、たしかに存在するが、子ども自身が意図していない感情までも自由画からよみとろうとする傾向をもつことはつつしみたいと考える。ありのままをありのままにうけとると、理由づけをしなくても大切な保育者の態度だと思ふ。

## 幼児画の指導について

新宿区立牛込仲之幼稚園

友田 静恵

年少組の時には個性豊かな絵が描けたのに、年長児になるに従って、幼稚園式自由画とでもいおうか、概念的、固定的なものになり、女兒はチューリップと人、男児は乗物と画材と表現形式が固定していく傾向がある。これは教師の指導が適切でなかったのではないか、又そこには幼児特有の心理的なものがあるのではないか、もしそのようなものがあるとすれば、どのような指導をしたらよいか、正しい描画の指導はどう在るべきかを考えてみたい。

幼児画の指導にあたり、先ず知っておかなければならない事は、描画の発達段階である。身体の発達と同様描画にも、発達の段階が

ある事は周知の事である。

錯画の段階、図式画の段階、立体画の段階とそれぞれの発達段階があるが、自分が今指導している幼児はどの段階にあるかを知り、個々の幼児に適應した指導をしなければならない。ぬたくりの時期にある幼児を、いきなり立体画の段階に引き上げようと無理をするから、形にはまった概念画になる。大人の場合で人はこう描くのですよ、自動車はこうと形を教えるので、子供は自分で感じとったものを押さえられ、形の模倣だけに終り、何を描いても大人から教えられた概念的なもののばかりを記憶の中からひっぱり出して形式的に描くようになる。何故チューリップや人形、乗り物に固定されるのは、大人からくりかえし教えられて、これだけは自信を持って描けるのと、自分たちの生活の中にある親しみやすいものであるのと、周囲の人からよく描けたと認めてもらえるからなのである。

概念的になる今一つの原因は、友達や兄弟からの影響もある。バードデイの折、十姉妹を描かせて、絵の先生に見ていただきましたら、「これを分類してみましよう」とおっしゃって、形式の似たようなものを分類したが、はつきりとグループ別に分けた。ある一人の幼児が小鳥らしく見えるものを描いたら、あとの子は皆まねをして描いたのだ。このように幼児は模倣性が強く、他からの影響も大きいですから、何時も同じグループにおくことは、絵を固定させる原因になる。一月に一回位グループを替える方がよい。

概念的、固定的な絵から抜け出させるためには生活経験を豊かにさせる事が大切である。これは常識論のようだが、描画活動には特に必要な事である。幼児は直接経験を通して、感覚を身につけ、表

現力も成長するのでいろいろなものをもてあそばせたり、みさせたりして作らせたりして造形物に対する感覚をいつも、新しくさせ画像を豊かに持たせることなどが創造的な絵が描ける素地を養うことになる。

只何んでもよいから自由に描いてごらんさいといっていたのでは、中々描けるものではない。この自由という言葉の美しいひびきに迷わされて、私達は絵の指導を放任しておく場合が多かったのではないであろうか、ある絵の先生は幼児の絵は特に指導しなくてもよい、綺麗な色のセーターをきて傍でみていればよいと申されましたがこれは理想論であって、この理想に近づけるようにする事は大切であるが放任はいけないと思う。自由画の指導が今迄あまりなされていなかったの、偏った表現が多かったようだ。よく躰をする場合にくりかえしくりかえしという言葉が使われますが、自由画の指導には、描かせる場の一つ一つが新しい面の開拓をなし、一歩々と前進していくように、適当な時に適当な助言が大切である。助言というのは技巧や表現の方法を、幼児に教えるのではなく、描いているうちに幼児自らが、その方法を発見するように助けてやる事だ。

描く前に話し合いによって、画想をまとめさせるとか、人形劇や紙芝居の面白かった場面を描かせるようにすると、幼児の興味を育てつつ夢のある、創造力豊かな絵がかかるようになる。楽しかった行事の印象画を描かせる方法も効果がある。

「昨日遠足にいきましたね、何に乗っていったでしょう、そう、觀光バスでしたね、麦畑のところを通って広い野原へ出しましたね、ひばりも鳴いていました」などと経験を通して、その強い感銘から表

現しやすういように導く。つまり幼児の心にあるものを引き出してやるように仕向ける。又自由画ばかり描かせますと絵が偏よるから、時々画題を指定してやる。画題を指定する場合には描きたくなるような、雰囲気を作ってやる事が大切であるが、指定画ばかりでは自発性をなくし、「先生今日は何をかくの」と指図なしでは描けなくなるので注意が肝要である。

室内の環境も表現の材料となるので新聞の写真を掲示したり美しい花を飾ったり、日除けのカーテン、黒板のカーテン等も美しいアップリケをしておく、それからヒントを得て描くのである。

幼児の作品も同じものを永く貼っておくとそれからも概念づけられるから、描いたあとは、鑑賞させる程度にしておくか、たえず新しいものと取り替えるようにする。

幼児の絵はその生活に結びついて、表現されるものだという事を認識して、その時代のレデネスに適した、夢や空想が表現出来るように指導する事が、概念画から抜け出す最良の方法だと思ふ。

## 幼児の絵画指導に

### 関する基本的研究

—自由画による幼児の絵画概念固定化  
に関する一実験—

栄光幼稚園 日名子太郎

幼稚園における絵画は、それを通じて幼児の創作的表現に対する興味を養い、創造性を培うことにありとされて居る。今迄の教育方法は確かに幼児の創造能力を萎縮せしめ、絵画概念を固定化する傾向のあった事は事実であろう。そしてこの弊害から免れる為、一切の技術指導を排せるこの方法論を生じて事も当然であると云えよう。子供達が明るく生々と自由にその生命力を表現し得たらどんなにか楽しい事であろう。しかし、表現力を教える事なしに自らの力で発見させ、その様な環境と雰囲気を整える事で果して幼児の創造力が培われるであろうか。私は今迄の経験から、この点に疑問を持ち、実験により、配色、題材について概念固定化の傾向を数量的に把握しようと試みた。以下、その方法と結果を報告する事とする。

1、対象 二年保育年少組(三十四名)

2、期間 一九五四年六月より一九五五年三月まで合計六十回

3、条件 絵画に関する一切の技術指導は除外し、家庭及び幼稚園における環境は可能な限り整える。

3、材料 クレパス十五色画

画用紙の大きさ 210×140 (白色)

但し途中二回だけ 210×280 を使用

5、被験者 第一表右欄参照のこと。

以上の条件で描かれた自由画をその配色、題材について見る為、その絵の主要な配色の色彩番号(これを第一次色彩要因と呼ぶ)及び使用全色彩番号を記録する。題材は、その都度、児童に何を書いているか、又何を書いたかを問ひ記録する外、これに実験者の観察結果も含め記載する。これらを六、七月の第一期、九、十月の第二期

第一表 第一次色彩要因による配色相関々係表

	$\rho I-IV$	$\rho II-IV$	$\rho III-IV$	生年月日	職 業	性別	分 娩	哺 乳	出産時体重
1	0.39	0.32	0.94	25. 2.22	会 社 員	男	正	母 乳	900㍉
2	0.23	0.52	0.58	24.11.21	//	//	安 産	//	800
3	0.54	-0.22	0.62	25. 1. 8	公 吏	//	//	混 合	740
4	0.14	0.42	0.51	24. 4.29	公 社 員	//	//	母 乳	800
5	0.34	0.33	0.15	24. 9. 1	魚 業 員	女	早 産	//	760
6	0.59	0.52	0.39	24. 5. 7	会 社 員	男	正	//	620
7	0.26	0.60	0.73	25. 1.21	//	//	//	//	850
8	0.44	0.80	0.21	24. 8.12	化 学 薬 品 販	男	//	混 合	830
9	0.46	0.23	0.51	//	//	//	//	//	890
10	0.03	0.52	0.53	24. 4.25	婦 人 子 供 製 造 卸 業	女	//	母 乳	830
11	0.44	0.35	0.17	24.10.24	駐 留 軍 勤 務 員	男	安 産	//	800
12	0.58	0.59	0.63	25. 1.26	会 社 員	//	正 産	//	750
13	0.49	0.49	0.68	24. 7.22	公 社 員	//	難 産	混 合	740
14	0.54	0.60	0.51	25. 2.21	会 社 員	女	正 産	//	670
15	0.31	0.32	0.71	24. 8.27	医 師	男	//	//	780
16	0.41	0.27	-0.11	25. 4.25	材 木 商 業	女	安 産	//	770
17	0.56	0.00	0.27	24.10.29	会 社 員	男	正 産	母 乳	830
18	0.46	0.12	-0.27	25. 3.27	歯 科 技 工 師	//	安 産	//	720
19	0.49	0.10	0.52	24.10. 7	浴 場 業 員	//	//	人 工 栄 養	680
20	0.66	0.30	0.16	24.12. 2	会 社 員	女	正 産	母 乳	930
21	0.50	0.42	0.86	25. 1. 5	印 刷 会 社	//	安 産	//	900
22	0.48	0.03	-1.24	24. 7.30	薬 局	男	早 産	//	660
23	0.82	-0.06	-0.07	25. 3.12	医 師	//	難 産	//	850
24	-0.06	0.32	0.65	24.10. 7	会 社 員	女	正 産	母 乳	721
25	0.40	0.23	0.44	24. 7.14	//	//	//	混 合	800
26	0.16	0.11	-0.18	25. 1.24	浴 場 業 員	//	安 産	//	920
27	-0.15	0.41	0.08	23. 5.30	会 社 員	女	正 産	母 乳	860
28	0.55	0.74	0.85	25. 1. 5	建 築 業	//	早 産	混 合	700

第 二 表

	$\rho I-IV$	$\rho II-IV$	$\rho III-IV$
0.20以下	18%	25%	32%
0.20~0.40	18%	32%	11%
6.40以上	64%	43%	57%

十一、十二月の第三期、一  
二、三月の第四期毎に、各  
色彩毎使用頻度を累計し、  
各期と第四期の間の相関関  
係を列位差法の公式

$$\rho = 1 - \frac{6SD^2}{N(N^2-1)} \quad [N: \text{色数}, D: \text{列位差}] \text{ により求}$$

める。若し相関係数 $\rho$ が高  
ければ入園時の主要配色と  
一年後の配色が余り変化な  
く固定化の傾向を持っている訳である。この結果  
が第一、二表である。これによれば途中多少の変  
化はあっても一年間の流れとしては殆んど入園時  
と変らない固定化傾向の強いものが大半である事  
が推察出来る。次に題材では、先ず各題材の百分  
率を求め、その内から主要題材(第一次題材要因)  
のみの百分率を表で示す。(第三表) これにすれ  
ば極端な子供では殆んど同じ一定の題材であり  
只、運動会、遠足、ひな祭り、映画、テレビ、  
ラジオ等刺戟の強い場合は相当の影響が見られる  
が、一年間を通じると極めて影響力の弱いものと  
なつて了っている。更に、この実験の参考として  
保護者へのアンケート中、「子供が絵の描き始め  
の時代にせがまれた時、何を書いて与えましたか

第三表 第一次題材原因による題材分類表

性別	No	I				II				III				IV				乗物	家	火事	その他
		80%	78.6%	77	95%	84.6	84.4	100	94.4	100	100	100	100	100	100	100	100				
男	1	80%	78.6%	77	95%	84.6	84.4	100	94.4	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100		
	2	88	84.6	94.4	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100		
	3	80	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100		
	4	50	63.4	70	50	70	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50		
	6	36.3	38.4	80	63.6	80	63.6	63.6	63.6	63.6	63.6	63.6	63.6	63.6	63.6	63.6	63.6	63.6	63.6		
	8	30	28.4	72.5	59.2	28.4	72.5	59.2	59.2	59.2	59.2	59.2	59.2	59.2	59.2	59.2	59.2	59.2	59.2		
	9	90.8	58.6	54.4	56.2	58.6	54.4	56.2	56.2	56.2	56.2	56.2	56.2	56.2	56.2	56.2	56.2	56.2	56.2		
	11	36.2	71.3	92.2	70.6	36.2	71.3	92.2	70.6	70.6	70.6	70.6	70.6	70.6	70.6	70.6	70.6	70.6	70.6		
	12	91.6	100	100	93.2	91.6	100	100	93.2	93.2	93.2	93.2	93.2	93.2	93.2	93.2	93.2	93.2	93.2		
	13	85.7	46.2	60	62.5	85.7	46.2	60	62.5	62.5	62.5	62.5	62.5	62.5	62.5	62.5	62.5	62.5	62.5		
15	60	33.3	81.7	39.9	60	33.3	81.7	39.9	39.9	39.9	39.9	39.9	39.9	39.9	39.9	39.9	39.9	39.9			
17	45.3	42.8	54.0	63.5	45.3	42.8	54.0	63.5	63.5	63.5	63.5	63.5	63.5	63.5	63.5	63.5	63.5	63.5			
18	71.4	85.7	84.6	94.4	71.4	85.7	84.6	94.4	94.4	94.4	94.4	94.4	94.4	94.4	94.4	94.4	94.4	94.4			
19	66.6	25.0	83.3	56.2	66.6	25.0	83.3	56.2	56.2	56.2	56.2	56.2	56.2	56.2	56.2	56.2	56.2	56.2			
22	100	40	7.7	74.9	100	40	7.7	74.9	74.9	74.9	74.9	74.9	74.9	74.9	74.9	74.9	74.9	74.9			
23	100	61.5	66.5	84.1	100	61.5	66.5	84.1	84.1	84.1	84.1	84.1	84.1	84.1	84.1	84.1	84.1	84.1			
25	100	100	100	77	100	100	100	77	77	77	77	77	77	77	77	77	77	77			
26	45.4	38.4	92.3	93.7	45.4	38.4	92.3	93.7	93.7	93.7	93.7	93.7	93.7	93.7	93.7	93.7	93.7	93.7			
女	5	45.3	58.2	91.7	72.2	45.3	58.2	91.7	72.2	72.2	72.2	72.2	72.2	72.2	72.2	72.2	72.2	72.2			
	7	22.2	71.4	38.4	95.3	22.2	71.4	38.4	95.3	95.3	95.3	95.3	95.3	95.3	95.3	95.3	95.3	95.3			
	10	90.8	92.2	100	37.4	90.8	92.2	100	37.4	37.4	37.4	37.4	37.4	37.4	37.4	37.4	37.4	37.4			
	14	81.7	38.4	91.6	100	81.7	38.4	91.6	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100			
	16	54.4	84.9	66.6	73.6	54.4	84.9	66.6	73.6	73.6	73.6	73.6	73.6	73.6	73.6	73.6	73.6	73.6			
	20	0	45.4	100	64.2	0	45.4	100	64.2	64.2	64.2	64.2	64.2	64.2	64.2	64.2	64.2	64.2			
	21	45.3	49.9	100	57	45.3	49.9	100	57	57	57	57	57	57	57	57	57	57			
	24	43	66.8	100	91	43	66.8	100	91	91	91	91	91	91	91	91	91	91			
	27	36.1	49.8	77.7	50	36.1	49.8	77.7	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50			
	28	80	80	68.4	55.4	80	80	68.4	55.4	55.4	55.4	55.4	55.4	55.4	55.4	55.4	55.4	55.4			

か」という質問に対する解答によれば、男子の場合、約八〇%が果物、家、動物を、女子の場合、約六〇%が人形、花、家、動物を書いて与えて居り、前記児童の題材分類とよく一致して居る。この二つの間に相関関係があるとは必ずしもいえないが、親自体の考えが既に相当程度概念が固定化している傾向のある事は見逃せない事実である。

以上綜合して、家庭、社会環境の整備を通じて行われる教育は勿論極めて大切な事であり、特に両親教育などは固定概念打破の上で、或程度有効であるが、これとても現実の問題としては限度があり、此処に問題が存在するのである。自由に描かせておいた丈では前記の如く決して創造性は培われる。今後の問題は、学校教育の限度内で、環境整備及び適当な技術指導の方法を充分研究して実施する所にあると思われる。ただ私の此処でいう技術指導が決して従来の様な概念的なものではない事はいう迄もない。

## 幼児の遊びに対する

## 親の態度

愛育研究所

竹田 俊雄

ここに報告する研究は、幼児の遊びに関する調査の一部分で、幼児の遊びに対して、その親がどのような考え方をしているかを明ら

かにしようとするものである。

研究の対象とした幼児は三才から六才までの男女合計一一九六名で、それは無作意抽出法によるものではないが、日本の各地方にわたっている。その生活する地区が人口十万以上の都市をA地域、人口十万以下の都市をB地域、町村をC地域と名づければ、調査児童数は第一表のようである。(頁数の都合により第一表省略)

調査の方法はその幼児の親に面接質問する方法で、調査員は心理学的の教養をもった女子学生である。その質問はいろいろの項目にわたっているが、今ここに報告するものは、

- 一、させたくない遊びがあるか
  - 二、遊び場所で困っていることがあるか
  - 三、遊び友達で困っていることがあるか
- の三項目について調査した結果である。なお調査の時期は昭和二十九年七月—八月である。

第一 させたくない遊びについて

親がその子に対して、させたくない遊びがあるか。「ある」は、第二表のように、男児では平均六六・八%となつて、女児では平均四六・九%となつているが、これを年令別に見ると、三才男はやや少いが、四才男以上は多く、女児は年令の上になるにつれて、減少の傾向が見える。しかし地域差については、男女とも著しい傾向が見られない。(頁数の都合により第二表省略)

そしてどのような遊びを、特にさせたくないと考えているかを示すものが第三表であるが、この中でやや多くの親に指摘されているのは、男児では「ちゃんばら、戦争ごっこ」と「かけごっこ」であ

第 3 表

	男	女
のぼる遊	4.3	1.6%
力をきそう遊	0.7	0.0
ものを投げ遊	4.3	0.3
花	2.7	1.6
ちゃんばら・戦争ごっこ	21.6	3.0
(単に)危険な遊	5.4	4.1
泥ギヤ	3.6	0.5
か性(医	10.7	1.0
お金の	0.9	6.4
水紙	0.2	0.8
紙お	7.8	10.5
いそ遊	0.9	1.0
遊	0.7	1.8
	0.9	0.3
	2.2	2.1
	9.5	8.2
	0.5	4.6

(%)は調査児童数に  
対するもの

り、女児では「水遊び」である。

第二 遊び場所について

こどもの遊び場所について、親が困っていることが「ある」というのは、第四表のようで、平均で男児三六・七%、女児三二・四%の程度である。年令的には四才児がもっとも多く、年長になるにつれ、やや減少を見せている。地域差については、A地域の男児がやや高いが、顕著ではない。(第四表省略)

遊ぶ場所のどんな問題で困っているか、親の表現を要約すると第五表のようであつて、「遊ぶ場所がない・少い・ほしい」というのが平均しておよそ一四%程度であり、それをやや具体化して「身体的に危険な場所です遊ぶ」というのが、男児では一九%あまりとなつている。年令差も地域の差も比較的少ない。(年令差の図表省略)

第三 遊び友達について

こどもの男び友達について、親が困っていると考えているものは、男児で平均四二%程度であり、女児で平均三五%程度である

第 5 表

	男				女			
	A	B	C	平均	A	B	C	平均
遊ぶ場所がない・い	15.9	13.2	11.7	14.1	17.9	13.5	10.9	14.5
少い・的に危	19.0	15.4	22.2	19.2	9.5	13.9	19.7	13.7
身な場所	0.3	0.0	0.0	0.2	0.4	0.0	1.0	0.5
衛生的に	0.3	0.0	0.0	0.2	1.5	1.5	0.5	1.2
性格形成上、好ま	2.1	2.2	1.2	1.9	0.0	0.7	0.0	0.2
くおげそ	2.1	1.5	1.8	1.9	3.7	1.5	1.6	2.5

が、年令的には女兒の三才児がやや顯著である。また地域的にA地域よりもC地域の方が多くなっている。これは第六表に見る通りである。(第六表省略)

男び友達のどのような問題について困っているかは、第七表が示すように種々であるが「友達がない、できない、少い、大ぜいと遊ばせたい」というのが、殊に年少児に多く、次には「友達が性格的に問題をもっている」

「友達と遊ぶと問題行動をする」とかいうものが見出され、男児の「友達が年長」というのも多分にこの傾向をもっている。これら三つの項目についての調査から見られることは次の諸点である。

(4) 親はこどもにさせたくない遊びについてもっとも関心をもつ

第 7 表

	男					女				
	3才	4才	5才	6才	平均	3才	4才	5才	6才	平均
友達がいない	16.0	12.6	10.0	7.6	11.2	13.6	6.4	8.2	7.3	8.2
仲間はずれに	0.0	0.5	0.5	0.0	0.3	0.0	0.0	0.4	0.8	0.3
友達が多すぎ	0.0	0.0	0.0	1.0	0.2	0.0	0.0	0.0	0.8	0.2
友達と遊ぶ	2.5	4.2	7.1	3.8	4.9	8.6	7.0	6.9	5.7	6.9
友達が年長	8.6	8.4	10.4	9.5	9.4	2.5	4.1	1.3	3.3	2.6
友達が年少	0.0	0.0	0.5	0.0	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
性の異なる友	1.2	0.5	1.4	0.0	0.9	12.3	8.8	4.7	4.0	6.7
友達が性格的	12.3	12.6	7.1	16.2	11.2	4.9	6.4	9.9	10.6	8.4
友達が知的	0.0	0.0	0.5	0.0	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
友達が身体的	1.2	0.0	1.4	0.0	0.7	2.5	0.0	0.4	0.8	0.7
友達が経済	0.0	1.0	0.0	1.0	0.0	2.5	0.0	0.9	0.8	0.8
友達がその他	2.5	3.1	4.7	4.8	3.9	0.0	1.2	2.6	2.4	1.8



てい、遊び友達の問題がその次であり、遊び場所の問題が第三になつてゐる。

(ロ) しかしその遊びに対する関心の度は保育関係者が期待するほど高くないように思われる。(これについては保育関係者の態度の調査を必要とする)

(イ) 困った遊びも身体的に危険という面が比較的考えの中心になつていて(例——男児のちゃんばら等と泥棒ごっこ等)、性格形成の問題はあまり考慮されていない。

(ニ) 遊び友達については年少児では友達のないことが問題とされているが、年長児では問題行動がおそれられている。

(ホ) 遊び場所については地域差による態度の差があまり見られない。

(ヘ) 幼児保育の立場から、遊び場所その他について親の一そう関心をもたせる必要があり、遊びの効果や友達についての正しい理解をもたせることが一段と望まれる。

なおこれらの結果および意見はこの遊びの調査の他の部分と関連させて考えられねばならない。

## 保育学における現在の関心の問題

東京都立大学

三井為友

昭和二十二年の第一回保育学会大会いらい今回の第八回に至るまでの研究発表題目は、シンポジウムも含めて百二十二題目になる。これを凡そその研究内容に従つて類別すると、その種別の頻数は次のようになる。

- A、幼児教育の周辺を問題にするもの(即ち、施設・保育者・両親等)……………一八
  - B、幼児の身体にかんするもの(保健・養護等をも含めて)……………一八
  - C、保育カリキュラムにかんするもの(保育内容の取扱いをも含めて)……………二二
  - D、幼児心理に関するもの(テスト等をも含めて)……………三六
  - E、保育方法にかんするもの……………二六
  - F、保育学評論にかんするもの……………三三
- つぎのグラフでは、これを大会の回数別に増減の状況をあらわしてみた。(表は頁数の都合で省略)
- ここから凡そつぎの三つの問題を考へてみる必要がある。
1. 学会大会での発表は、必ずしもその学問領域での全般的な傾向をあらわしてはいない。医学会や法学会などについては、全般的傾向を代表する色彩が可成り濃厚に見られるが、他の方面では時間的・地理的制約が相当強く働いて、学界の一部の動向しかあらわれない場合が多い。保育学のばあいもこの例外ではないが、出来るだけ色々な制約を破つて、その学問全般の傾向を代表するような方向へ持つてゆきたい。
  2. 八回の学会大会の集計にあらわれたところをみると、第一位

が幼児心理、第二位が保育方法、第三位が保育カリキュラムとなっている。教育の問題が、対象・方法・内容の三つの要素を特に注目しなければならぬことを考えると、これは当然の傾向と言える。しかも、Bの身体面も対象把握の一面であるから、これをDの幼児心理に加えると、対象の問題は五四という圧倒的な多数になる。大会の回数別にみると、幼児心理と保育方法の問題が、近年とみに増加傾向の著しいのたいして、カリキュラムに関するものは、発足いらい増減がなく、近年逆に減少の傾向さえみられる。これは一つの問題であろう。

3. 特にいちじるしい特長として、保育学評論にかんするものが貧困である。保育にかんする科学の前進のためには、それが問題としているものの課題意識や、分析解明の方法などについて、批判し反省する必要がある。このような評論の活動は、もう少し活潑になってもよいのではなからうか。

以上三点の問題の背後に、大会での発表のみならず、月刊雑誌や単行本をも含めて通観して、保育学における現在の関心という基本的な問題が横たわっている。研究の関心が、現在の課題に集中的につなぎとめられているのではないか、ということである。

歴史的な研究に関心を示したものとして、戦前には倉橋先生をはじめとする幼稚園史の研究、フレーベルやその他の人の保育思想に関する研究など、かなり多くのものが見られた。戦後のものとしては、古木弘造氏「幼児保育史」(一九四九、厳松堂)と高橋さやか氏「家庭と保育の歴史」(一九五四、博文社)の二つが見られる位である。

保育の問題は、未開拓の分野が余りに多くて、到底歴史的研究にまで手をのばしている余裕がないということも考えられる。

しかし、歴史的な研究なくして、幼児教育の方向が考えられるであろうか。保育対象の把握は、心理学・生理学・医学などによっても、相当地に深められるであろう。保育の内容や方法の研究も、現在の事態の改造や分析によって推進せられると思われる。しかし、幼児をどのような方向に形成すべきかということは、現在の関心の事態からのみでは、うまれて来ないと考えられる。

しかも、一步を進めて考えれば、対象の把握も、内容・方法の批判も、歴史的観点を除いては、著しく根拠が薄弱になりはしないかと憂えられる。いわば、史的研究は、対象や内容や方法の研究にも、内在しなければならぬように思われる。

ラッセルは、「教育と善き生活」の中で幼児教育の意義を評価して次のように言っている。

「幼稚園が一般的になったら、今日階級と階級とを分離させている深い溝を一時代で除き去り、今日最も幸運なものに限られて恵まれている精神と身体との発達を、すべての者が享受できるように国民をうみ、今日進歩というものを阻害している病氣や無智や悪意などという恐ろしい重荷を取り除くことができる」と。

保育者にとって、このような確信は、歴史的視点あってはじめてうまれてくるものであり、また同時にラッセルの無制限の楽天性もまた、歴史的視点の薄弱さから来るといふ批判もうまれてくるであろう。幼児教育が一般化し得ない外的な諸困難とのたたかいかいも、ここからうまれてくるであろうし、このようなたたかいかいの中で営まれる

保育実践でない限り、保育は箱庭の中のまき(ま)ことに終る危険を支持してゐる。

保育対象を歴史の中に把握するということは、超越的、ドグマ的な歴史を対象に押しつけるということであつてはならない。ここに戦時中の幼児観の批判されねばならない点がある。(例えば武政太郎氏「幼児の心理と教育」一九四三、藤井書店)それは、幼児の中に歴史を見ることでなければならぬ。幼児を個性的に、真に独自のものとして把握することは、ここから可能になるであろう。

なお、これらの点について、Hise Forest, *Preschool Education*, 1927, Robert Rusk, *A History of Infant Education*, 1951, A.J. Sorokina, *Lehrbuch der Vorschulpädagogik*, 1951 や乾孝・天野章「保育のための児童心理学」などについて考察してみたい。

## デューイの幼児教育思想

### とその現代的意義

大阪学芸大学 小川 正 通

#### 一、このテーマをとりあげた動機

(1)今日の米・英・日の幼児教育の理論と実際は、デューイの大きい影響を受けている。(2)しかるにわが国の幼児教育界では、フリー

ベルの名のみ高く、デューイは理解されていない。現代的見地から、デューイを高く評価すべきである。(3)この学会に思想面の発表が少ないこと。

#### 二、デューイの幼児教育関係文献と当時の教育界の状況

ジョン・デューイ John Dewey (1859-1952) はアメリカが生んだ世界的な経験論的哲学者。多数の著書・論文があるが、幼児教育プロバターのものは皆無。しかし私の知る限りでも、「学校と社会」(一九一九)、「学校と児童」(一九〇五英國版)、「思考の方法」(一九一〇)、「民主主義と教育」(一九一六)の四冊で、幼児教育に言及、一貫して、フリーベル批判を通じ、自説を展開。しかし体系的ではない。いずれも約四十年前以上前の論説。

一九世紀末―二〇世紀初頭のアメリカの一般教育界は、ベスタロッチー、フリーベル、ついでヘーゲル派、ヘルバルト派の歐洲教育思想が紹介、唱導されていた。その間に、アメリカのホール、ついでソーダイクなどの「児童研究」運動が漸く擡頭。なお實際教育では、「書物中心」の旧教育が支配的だった。幼稚園界では、フリーベルの伝統を墨守し、それを一層形式化したプロローを代表者とする保守派の力が強く、それにヒルを代表者とする進歩派が対立。論争十年以上。「児童研究」とデューイ・キルパトリックに支持されたヒル派の勝利に歸した。そして「児童中心」に転向し、多少の変遷をへて、これが今日のアメリカ幼稚園教育の本流である。

#### 三、デューイの幼児教育思想と現代的意義

##### (一)デューイの成長としての教育

人間の生命は發展であり、教育は成長發展に関し、教育過程は経

験の改造・再構成である。幼少期の未成熟の特徴は、他による成長の「依頼性」と「可塑性」で、後者は経験から学ぶ能力・習慣を作る力である。受動的習慣が土台だが、教育上、能動的習慣が重要で、それにより人間は、環境に適應するだけでなく、環境を克服する。児童は自己の能動的活動経験により、社会環境を媒介とし、目的・手段・方法が連続する発達をなす。個人の理想的成長は、理想社会を保証する。

### (二) フレーベル批判―開発主義と象徴主義

フレーベル思想は、開<sup>アノク</sup>発<sup>エテシテ</sup>(展開)の思想で、人間の中に内在する神的統一の展開を説き、デューイが単に成長の能力と考える本源的自然に神性(善)を認める。しかもその開発に際して、絶対(神)の象徴としての恩物媒介の心要論を唱え、象徴主義に陥った。フレーベルが幼き者の生得的能力の意義を認め、「遊びは一切の善なるものの源泉である」(人間の教育)とし遊びの教育的価値を発見し、幼き者に深い愛情を示し、児童研究と成長概念を一步前進させたのは、偉大な功績であると、デューイも称讃の辞を惜まない。しかし彼は、遊びは児童の心身の自由な自己表現発達力の実現充実であり、「心理的態度で、それは与えられ、決められた仕方、恩物・遊戯・作業の既成の組合せに従うことからの完全解放」を要求する。フレーベルとその垂流は、恩物により宇宙の理法を幼児に知らさんと考え、また幼児を円形に集め、それが人類の集合生活の象徴だと意味付けようとする。しかるに子どもには現実と象徴の両者を意識できない。故に象徴を手段とし精神的真理を教えようとすることは、かえって不誠意を教え、感傷主義を注ぎ、感覚主義を養うこと

になる。しかしデューイはまたフレーベルを尊敬して、万有在神論に基づく開発思想と象徴的恩物観は、(1)当時の心理学・生理学の未発達、(2)ドイツの抑圧的な政治・社会状況との産物であるといひ、フレーベルの継承者を警しめ、科学が進み、自由・進歩的な今日の社会では、彼の思想の近代化の必要を説く。それが彼の遺志であり彼に忠実な者は、彼を脱却すべしとする。

### (三) 現実生活の強調と幼・小の連けい

デューイも児童の想像生活を認めるが、象徴を介する想像活動は否認する。当時の幼稚園では、人形機関車などの遊具を想像活動を促進せぬと禁じ、真似ごとの室を真似ごとの帯・雑巾で真似ごとの掃除をさせていたが、彼は想像活動を培うものは、現実的・直接的・率直なものであり、それが経験の再構成に役立つとする。

また「遊び」と「仕事」は、普通いわれるように差別的なものではなく、園児・低学年児童のそれは、連続的一体であると説く。従来なきびしい差別観は、幼小を分離させ、無目的な遊びの名称で幼稚園は、象徴的・想像的・気分的・気ままな保育を正しいとし、小学校では仕事の名のもとに、教師にしか解らぬ高い目的を立て、困難な課業を外から課してきた。そして幼・小両教員が反目していた。この不幸な分裂傾向は、デューイ・キルパトリック・ヒル・「児童研究者」の努力が、やがて解決させ、今日のアメリカの小学校下級部としての幼稚園しかも幼稚園を基礎とする小学校―教育内容の一貫した―デューイの理想を実験・実証したのが、先にはシカゴ大学の、後にはコロンビア大学の附属校であった。そこでは園児の一年生への連絡を考慮して、園児独自の家庭生活中心のプロジェク

学習を行い、それに応じた現実的・直接的な遊具・教材を活用した。

以上は、さきあげた四冊の本を中心とする幼児教育思想の大略。この文脈の中からも、彼の思想の現代的意味は、自然に了解されるであらう。

#### 四、むすび

(1) デューイとフレーベルは、根本思想が違ふ。故にフレーベル批判もかなり酷である。フレーベルの「人間の教育」には、人間性の固定でなく、連続的発展的発展観が十分認められる。またフレーベル派攻撃のとはちりがフレーベル自身にも及んでいる。(2) アメリカ資本主義上昇期の思想で、今日のわが国の幼児教育を併せ考えるに当って、楽観的すぎるきらいが多い。——児童中心の傾向が強いこと、固定的習慣や集団生活訓練を重視せぬこと、家庭的プロジェクトの問題点(ラスクがいうようにやや程度が高級なこととわが国の家庭の封建性貧困性から考えて)など。

以上の限界をもちながらも、デューイを高く評価すべきである。しかしまたデューイがフレーベルよりの脱却を説くように、われわれは今やデューイからの脱却をも必要としているのではあるまいか。



### 内 案 御 刊 新

倉橋惣三著

子供讃歌  
B六三三頁 定価二六〇円 下二四

内山憲尚著  
インドのお話集

あわてうさぎ  
A五一七頁 定価二二〇円 下二四

村上幸雄編

幼児はるのひよこ  
劇集 A五一七頁 定価二二〇円 下二四

長田 新著

フレーベルに還れ  
B六一四頁 定価二〇〇円 下二六

落合聰三郎・周郷博編

幼児劇集 たのしい劇あそび  
A五三三頁 定価二八〇円 下三二



株式会社

# フレール館

東京都千代田区神田小川町2ノ5 電話東京(29) 7781~7785 振替東京19640

# 倉橋惣三先生追悼講演会

—五月二十一日 九時三十分より十一時三十分—

主催  
日本幼稚園協会  
日本保育学会

## 講演

お茶の水女子大学附属幼稚園長 及川 ふみ氏  
東京家政大学教授 山下 俊郎氏  
専修大学教授 堀 七藏氏  
お茶の水女子大学庶務課長 細 井 真氏  
睦学園女子短大助教授 山崎 と きの氏  
玉城高等保育学校長 有 院 扁 良氏

なお講演会に加えて、故先生の或し日のお姿を記録した映画、幻燈の上映に、来会者一同は、たゞ愁嘆目を潤ませるばかりであった。

☆幼児教育界におくる

倉橋惣三先生の二著！

幼稚園真諦

B六判一四六頁 定価一八〇円

子供讃歌

B六判二三四頁 定価二六〇円

倉橋惣三先生が、永年に亘り考究された幼児保育の真のあり方を、体験によるうらづけと、先生の美しい心のままに、平明に描かれた書で、幼児教育にたずさわる先生方が、必ず一度はお読みになつて、ほんとうの意味の幼稚園の理解と、倉橋先生のりっぱな児童観を、会得していただきたいと思ひます。

株式会社 フレーベル館

# 日本保育学会第八回大会記事

第八回大会は、昭和三十年五月二十一日(土)、二十二日(日)の  
 兩日、お茶の水女子大学(東京都文京区大塚)の講堂を会場として  
 開催された。

この大会の来会者は、第一日・第二日の兩日とも約一二〇〇名で  
 あつた。

今大会で特記すべきことは、第一に、本会創立以来の会長である  
 倉橋惣三先生が逝去されたため、その追悼講演会が、日本幼稚園協  
 会との共催で、ひらかれたことである。次に、役員の変更、新会長  
 の選出、をあげることができる。その結果、次のようにきまつた。

日本保育学会役員(昭和三十年五月二十一日選任)

会 長 山下 俊郎  
 副会長 小川 正通 莊司 雅子  
 委 員 (○印常任委員)  
 秋田 美子 及川 ふみ 大西 憲明  
 岡田しげの 小川 正通 上村 哲彌

城戸幡太郎 児 玉省 齋藤 文雄  
 島津 峯真 莊司 雅子 周郷 博  
 鈴木 とく 鈴木 信政 副島 ハマ  
 竹田 俊雄 珠川 善子 玉越 三朗  
 津守 真 西本 脩 根岸 草笛  
 波多野完治 平井 信義 古木 弘造  
 堀 要 松村 康平 三木 安正  
 宮内 孝 村山 貞雄 森脇 要  
 守屋 光雄 山崎ときの 山下 俊郎  
 横田栄三郎 吉見 静江  
 會計監査 牛島 義友

これに先立ち、昭和三十年度総会が、山下俊郎副会長を議長とし  
 て進められ、昭和二十九年度事業報告(竹田常任委員報告)同會計  
 決算報告(村山常任委員報告)が承認され次期大会は、根岸草笛氏  
 が準備委員長となつて、準備にあたることになつた。

なお本大会は、関東で準備がなされ、(準備委員長)松村康平、(副委員長)平井信義、その他、神谷映子、お茶の水女子大学家政学部児童学研究室の助手・千羽喜代子、研究生・森脇多恵子、古川裕、守永英子、児童学科学生、幼稚園教員養成生、大学事務職員たちが主として、会場の準備・運営にあつた。

大会期日が二日にわたつたのは、今回はじめであり、プログラムの編成にも新しさを加え、例えば、研究発表者にあらかじめ概要を提出してもらつて、プログラムにいれることができた。また、規定の時間通りに研究発表が、そつなくおこなわれ、内容的にも学会としての体裁をようやくとのえてきたと感ぜられた。

かうして、本大会は、一応の成功をおさめ得たと思われる。

運営にあつては、フレイベル館・ひかりのくに社・チャイルドブック社・よいこのくに社・福音館の援助を得ることができ、映画上映にあつては、稲垣・五百旗頭両氏に一方ならぬご協力を得たし大会の記事整理にあつては、児童学研究室関係者、ことに千羽さんの労をおしまぬ努力に、多くを負つている。紙上をかりて、謝意を表する次第である。大会のシンポジウム・共同研究発表記事(本邦幼児の発達基準の研究)は、紙数の都合で、「幼児の教育」次号に掲載の予定である。(松村康平記)

### ▽九月号の増頁について△

本誌九月号は例年どおり日本保育学会の発表を特集いたしましたので、毎月の定頁五十二頁を超過し、八十頁といたしました。

また本学会に多少とも協力するため、定価も五十円として据置きにいたします。

株式会社 フレイベル館

### 幼児の教育 第五十四巻 第九号

定価金五十円

昭和三十年八月二十五日印刷

昭和三十年九月一日発行

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真

発行者

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

印刷所 東京都板橋区志村町五番地 凸版印刷株式会社

発売所 東京都千代田区神田小川町二ノ五 株式会社 フレイベル館

振替口座東京一九六四〇番

○本誌御購読についての御注文は発売所 フレイベル館にお願い致します。